

42520

教科書文庫

4
815
44-1937
20000 64970

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

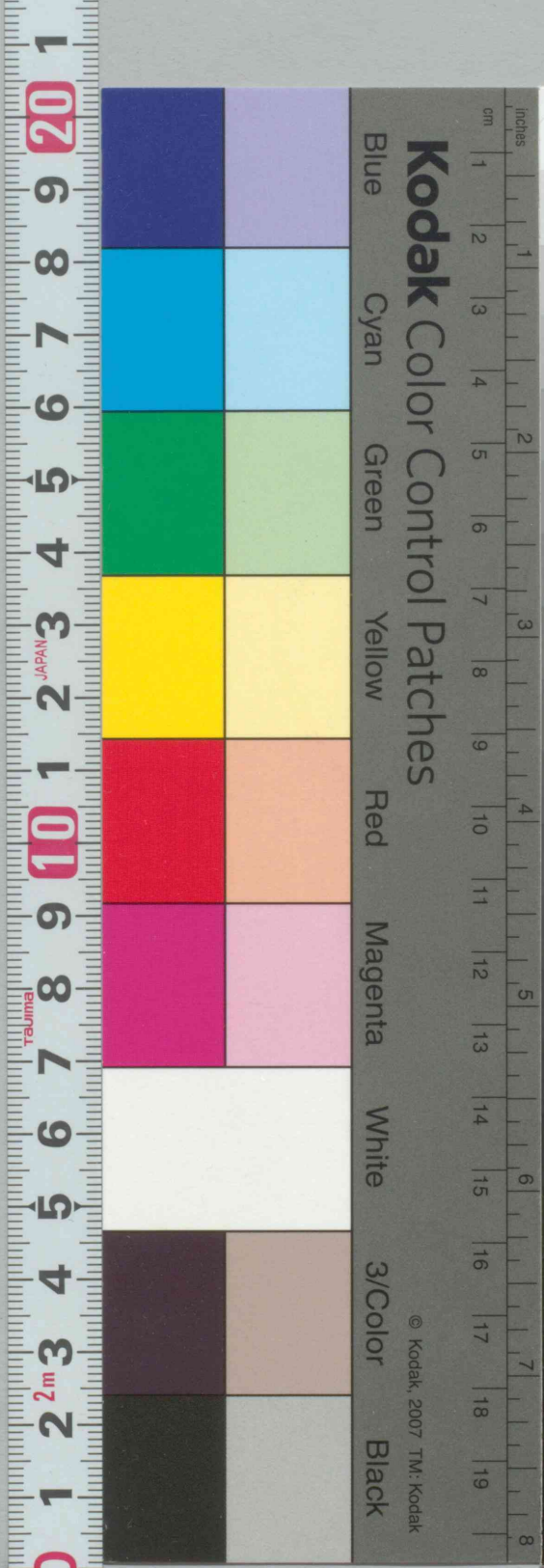


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
An 4  
資料室

安藤正次著

新教授要目準據

新編實業日本文法



日七月二十年二十和昭  
濟定檢省部文  
用科語國校學業實

# 新編實業日本文法

臺北帝國大學教授 安藤正次 著

教科書文庫  
4  
815  
44-1937  
2000064970



據準目要授教新

資料室

3759

An 4

例言

一、本書は、實業學校用の教科文典として、改正教授要目に準據して編纂されたものである。編者は、本書の編纂に當り、特に實業學校における國語教授の使命と實際とに鑑みて、十分に諸般の考慮を加へた。

一、本書は、學習者をして、まづ、その日常親しんでゐる口語の法則を知らしめ、次に、口語の上に得られた知識を基礎として、文語の法則に進ましめるといふ順序にしたがつてゐる。

一、本書は、成るべく、煩瑣な分類を避け、特異の用法に捉はれず、學習者をして、實際の運用に直面せしめる方針によつてゐる。初歩の文法教授は、簡明直截なるをよしとするからである。

一、本書の例題は、尋常小學讀本によつたものが多い。その以外のものに

あつても、出来得る限り、平易なものを選んだ。語句の難解が、累を他に及ぼすことを慮つてである。

一、例文および練習問題の、口語・文語の兩者にわたる場合にあつては、特に\*印をつけて、文語を示すことにしてある。

昭和十二年六月

編者 しろす

# 新編實業日本文法

## 目次

第一章 文・句・語	一	九 感動詞	一五
一文	一	一〇 助詞	一六
二句	二	第三章 動詞の活用形	一七
三語	二	一 活用形・語幹・語尾	一七
第二章 品詞	五	二 活用形の六種	一八
一品詞の類別	五	第四章 口語動詞の活用	二二
二 名詞・數詞	五	一 活用の種類	二二
三 代名詞	六	二 四段活用	二三
四 動詞	二	三 下一段活用	二三
五 形容詞	二	四 上一段活用	二七
六 助動詞	三	五 加行變格活用	二八
七 副詞	四	六 佐行變格活用	二九
八 接續詞	五	七 口語動詞の識別	三三
目次			

第五章 文語動詞の活用……………三

一 活用の種類……………三

二 四段活用……………三

三 奈行變格活用……………三

四 良行變格活用……………三

五 下一段活用……………三

六 下二段活用……………三

七 上一段活用……………三

八 上二段活用……………三

九 加行變格活用……………三

一〇 佐行變格活用……………三

一一 文語動詞の識別……………三

第六章 形容詞の活用形……………三

一 活用形・語幹・語尾……………三

二 活用形の五種……………三

第七章 口語形容詞の活用……………三

一 活用の種類……………三

二 久活用……………三

三 志久活用……………三

第八章 文語形容詞の活用……………三

一 活用の種類……………三

二 久活用……………三

三 志久活用……………三

第九章 動詞・形容詞の音便……………三

一 音便……………三

二 イ音便……………三

三 ウ音便……………三

四 撥音便……………三

五 促音便……………三

第十章 助動詞……………三

一 助動詞の種類……………三

二 助動詞の活用……………三

第十一章 口語の助動詞……………三

一 體言につく助動詞……………三

二 動詞・助動詞の未然形につく助動詞……………三

三 動詞・助動詞の連用形につく助動詞……………三

四 動詞・助動詞の終止形につく助動詞……………三

五 特殊の助動詞……………三

第十二章 文語の助動詞……………三

一 體言につく助動詞……………三

二 動詞・助動詞の未然形につく助動詞……………三

三 動詞・助動詞の連用形につく助動詞……………三

四 動詞・助動詞の終止形につく助動詞……………三

五 特殊の助動詞……………三

第十三章 助詞……………三

一 助詞の職能・種類……………三

二 位格を示す助詞……………三

三 接続をあらはす助詞……………三

四 意味を添へる助詞……………三

第十四章 文および文の成分……………三

一 主部・述部……………三

二 主語・述語……………三

三 補語……………三

四 修飾語、被修飾語……………三

第十五章 文の複合・節……………三

一 文の複合……………三

二 節、節の種類……………三

三 體言節……………三

四 用言節……………三

五 連體節……………三

六 連用節……………三

第十六章 文の連結……………三

一 文の連結……………三

二 從屬的連結……………三

三 對立的連結……………三

第十七章 主語各説……………三

一 文の主語……………三

二 文の主語と助詞……………三

三 體言節・連體節の主語と助詞……………	三三	四 形容詞の補語……………	三三
四 連用節の主語と助詞……………	三三	五 助動詞の補語……………	三三
五 の・がと他の助詞……………	三三	六 使役の補語……………	三三
第十八章 述語各説……………	三三	七 受身の補語……………	三三
一 文の述語……………	三三	第二十章 修飾語各説……………	三五
二 文の述語の形態……………	三四	一 修飾語……………	三五
三 係結の法則……………	三五	二 修飾語の種類……………	三五
四 體言節の述語……………	三六	三 連體的修飾語……………	三五
五 連體節の述語……………	三七	四 連用的修飾語……………	三五
六 連用節の述語……………	三七	第二十一章 文の種類……………	三六
七 文の連結と述語……………	三六	一 文の種類……………	三六
第十九章 補語各説……………	三六	二 單文……………	三六
一 文の補語……………	三六	三 複文……………	四〇
二 文の補語の形態・種類……………	三六	四 重文……………	四〇
三 動詞の補語……………	三六	附 録……………	四一

目次終

新編實業日本文法

第一章 文・句・語

(一) 文

花が 咲いた。

藤の花が きれいに咲いた。

右のやうな、一つ々きの言葉は、花が藤の花がといふ、敘述の主題をあらはす部分と、咲いたきれいに咲いたといふ、主題について敘述する部分とから成り、一つのまとまつた思想をいひあらはしてゐる。

文法上では、右のやうな、一つのまとまつた思想のいひあらはされ

たもので、敘述の主題となる部分と、主題について敘述する部分とから成る、一つゞきの言葉を、文と名づける。

〔二〕句

山の上。藤の花。きれいに咲いた。  
東から西へ。空を斜に。

右のやうな類は、一つゞきの言葉とはなつてゐるが、敘述の主題となる部分と、主題について敘述する部分との關係が成立つてゐない。かういふ類の、一つゞきの言葉を、文法上で、句といふ。

語

〔三〕語

風が吹く。  
木がゆれる。

右の例において、それぐの、一つゞきの言葉を分解してみると、風が吹くは、風が吹く、の三つの言葉から出來て居り、木がゆれるは、木がゆれる、の三つの言葉から出來てゐる。かういふ一つ一つの言葉を、文法上で、語といふ。

次の文について、敘述の主題の部分と、主題について敘述する部分とを區別なさい。

- 一、一本の楠の木が或所にありました。
- 二、その楠の木は晝も夜もぐんぐんとのびて行きました。
- 三、楠の木はその高い木末に時々雲がかゝるほどになりました。
- 四、大きなしげつた枝はどこまでつゞいてゐるか見きはめもつかないほどに四方にひろがりました。
- 五、楠の木の西側にあるたぐさんの村々はみんな日かげになります。

次の例について、これを語に分けてごらん下さい。

- 一、あたまを雲の上に出し、四方の山を見おろして、かみなりさまを下に聞く、富士は日本一の山。
- 二、青空高くそびえ立ち、からだに雪の着物着て、霞の裾を遠くひく、富士は日本一の山。
- 三、蜘蛛は、後の方の足を動かして、おしりのところから、たくさんの、細い糸を引出しはじめました。
- 四、松は、ずんく、大きくなりました。おぢいさんは、その松の木で、白をこしらへました。それで米をつくと、おかねや寶物がたくさん出ました。
- 五、大川の水の上、川ばたの工場の煙突の長いかげ、ゆらく、ゆらく、川舟が静かに通る。舟のかけ、人のかけ、人の持つ棹のかけ、ゆらく、ゆらく。

## 第二章 品詞

### 品詞の類別

#### 一、品詞の類別

二、文法上で、語を、その性質や用法にしたがつて、左の九つの品詞に分ける。これを、品詞の類別といふ。

名詞。代名詞。動詞。形容詞。副詞。接續詞。感動詞。  
助動詞。助詞。

#### 二、名詞數詞

木。石。春。秋。心。身。表。裏。菅原道眞。東京。植木。  
眞心。人々。子供たち。

右のやうな、人や事物の名稱として、人や事物をいひあらはすに用

名詞・數詞  
名詞



數詞

みられる語を、名詞といふ。

一に二を足せば、三となる。

鉛筆は、五ダースあります。

わが國の第一の高山は、新高山です。

名詞のうちには、右のやうな事物の數量順序を數へるに用ゐられるものがある。特に區別していふ必要のある時には、この類のものを、數詞と名づける。

代名詞

〔三〕代名詞

私。君。僕。あなた。おまへ。これ。それ。あれ。こゝ。そこ。あちら。こちら。

右のやうな、人事物場所方向を指示するに用ゐられる語を、代名詞といふ。

代名詞を、人代名詞と事所代名詞との二つに分ける。

わたくしは、今年十三になります。

君は、どこへ行つてゐたのです。

だれが、こないたづらをしました。

\*余は、これを知らず。

\*われ、汝に語らむ。

\*彼は、いづくに行きしぞ。

\*高く歌へるは、たれぞ。

\*わが家は、水に近し。

右のやうな、人を指示するに用ゐられる語を、人代名詞といふ。これらのうちで、わがは、古くは獨立して用ゐられてゐたわといふ人代名詞に、がといふ語のついたものであるが、現代では、わがといふ形ばかり用ゐられるから、がのついたものを、一語として取扱ふ。

人代名詞

事物を指示するに用ゐられる代名詞

これは、いくらですか。  
 この本は、二圓です。  
 どれが、おのぞみですか。  
 どの品でも、結構です。  
 あの木は、何の木でせう。  
 \*これとそれと、いづれかよき。  
 \*かの品は、好ましかからず。  
 \*われ、その故を知らず。

右のやうな語は、事物を指示するに用ゐられる代名詞である。これらのうちで、この・どの・あの・かの・そのの如きは、もと、こと・あ・か・そといふ代名詞に、のといふ語のついたものであるが、現代では、いづれもの・のついた形ばかり用ゐられるから、ののついたものを、一語として取扱ふ。

場所を指示するに用ゐられる代名詞

方向を指示するに用ゐられる代名詞

右のやうな語は、場所を指示するに用ゐられる代名詞である。

こ・ち・ら・へ・い・ら・つ・し・や・い。  
 そ・ち・ら・へ・ま・り・ま・せ・う。  
 あ・ち・ら・へ・お・い・で・に・な・り・ま・せ・ん・か。  
 \*鶏の聲、こなたかなたに聞ゆ。  
 \*あなたに見ゆるは、小豆島ならむ。

右のやうな語は、方向を指示するに用ゐられる代名詞である。すべて、事物場所方向を示すに用ゐられる語を、事所代名詞といふ。

以上の名詞代名詞を總稱して、體言といふ。

次の例について、名詞數詞代名詞を指摘なさい。

- 一、「お前はえらいね。誰に教へてもらつたの。」誰にも教へてもらはなないので。僕が考へて作つたのです。」
- 二、「學校が見える、學校が見える。」と、だれかがいひました。そちらへ行つて見ますと、木の間から、學校や役場が、小さく見えました。
- 三、「あの汽車は、この山の下のトンネルを通ります。私たちも、かへりには、汽車に乗つて、この山の下の下を通るのです。」と、先生がおつしやいました。
- 四、「私のかぜは、ごく輕うございましたから、二日學校を休んだだけでなほりました。」
- 五、「おばあさんが、鍋を買ひに行きました。五十錢のでは小さ過ぎるし、一圓のでは大き過ぎる、どちらにしようかと迷ひましたが、五十

錢のでよからう。」と、小さい方を買つて歸りました。  
 六、空は青空、うなりを立てて、あがる字だこにきれいな繪紙、一つ二つと數へて居れば、鳶も出て舞ふ、大空高く。

〔四〕動詞

日が照る。水が流れる。子供が、いたづらをする。  
 \*日暮る。\*猫、鼠を捕ふ。\*丘の上に、一本松あり。  
 右のやうな、人や事物の動作存在をいひあらはすに用ゐられる語を、動詞といふ。  
 動詞は、照るが、照らない。照ります。照る日。照ればとなるやうに、場合に應じて語形の變化するのを、その特徴とする。

〔五〕形容詞

海が青い。虹が美しい。夜の海はものすごい。

\*月清し。\*ばらの花美し。\*功を誇らざる人は尊し。

右のやうな人や事物の性質状態をいひあらはすに用ゐられる語を形容詞といふ。

形容詞も青いが、「青く見える」「青い色」「青ければ」となるやうに、場合に應じて、語形の變化するのを、その特徴とする。

〔六〕助動詞

助動詞

これは、僕の靴です。私は、もう歸ります。雨が、なか／＼やまない。

\*汝を呼びたるは、われなり。\*月、やがて出でむ。\*風もやむべし。

右のやうな名詞代名詞動詞などの下について、そのいひあらはし

方を助ける語を助動詞といふ。

助動詞は、他の助動詞の下について、そのいひあらはし方を助けることもある。

助動詞も、ですが、「誰の靴でせう」「私の靴でした」となるやうに、場合に應じて、語形の變化するのを、その特徴とする。

動詞形容詞助動詞を總稱して、用言といふ。

用言

次の例について、動詞形容詞助動詞を指摘なさい。

一、昨日から、うちの蠶が上り始めました。

二、上る頃には、蠶のからだだが、すき通るやうになります。

三、もう、桑の葉をたべないで、頭を上げて、繭をかける所をさがします。

四、とびが鳴く、春の空。まるい、大きい輪をかいて。

五、神さまは、海の上をお見わたしになりました。すると、東の方の遠い國に、餘分の土地のあるのが見えました。

六、神さまはその國に、太い、太い綱をかけて、うんと力を出して、お引きになりました。

副詞

〔七〕副詞

雨が、ひどく降る。あの山は、かなり高い。ちつとも知りませんでした。

\*春の風、のどかに吹く。\*山鳩の聲、ほろくと聞ゆ。\*諸子、宜しく反省すべし。

右のやうな、動詞形容詞などの上について、その意味を修飾するに用ゐられる語を、副詞といふ。

副詞は、他の副詞の上につくこともある。

副詞は、また、次のやうに、時としては、名詞を修飾することがある。  
もつと左でせう。 たつた一つです。

\*わづかに五里なり。\*やゝ北に傾く。

接續詞

〔八〕接續詞

山また山の奥です。

道はわるい。しかし景色がよい。

\*社長は、令息並びに令嬢を伴へり。

\*車馬の通行を禁ず。但し、郵便車は、この限にあらず。

右のやうな、語句の中間にあつて、語句を結びつけるに用ゐられた、文のはじめにあつて、前文を承けるに用ゐられる語を、接續詞といふ。

感動詞

〔九〕感動詞

おゝ、大變だ。さあ、出かけよう。

助詞

\*あはれ、悼ましきかな。\*やよ、待て、しばし。

右のやうな感情の聲の語として用ゐられるものを感動詞といふ。

二〇助詞

山の上。櫻の花。雪と墨。竹に雀。梅が枝。君が代。

花が咲く。風も吹く。月を見る。

雨は降り出したが、たいしたことあるまい。

\*月は出でたりや。\*悔ゆる心無きか。

右のやうな語句の間に立ち、またはその下について、語句相互の關係を示し、また、或意味をいひそへるに用ゐられる語を助詞といふ。

次の文について、副詞、接續詞、感動詞、助詞を區別なさい。

一、あゝ、月が、いま上ります。

二、雲は、まだ出てゐますが、風は、すつかり止みました。

三、窓から、外を眺めても、何も見えません。

四、今日は、病院へ行かなくともよいのです。

五、この本は、だれのですか。

六、山羊は、柵のきには、秋の日をあびて、すわつてゐました。

七、やあ、あれは火事でせう。空が眞赤です。

八、牛若丸は、ひらりと、らんかんの上にとびあがりました。

第三章 動詞の活用形

活用形・語幹・語尾

一 活用形語幹語尾

雨は降らない。雨が降りませう。雨が降る。雨の降る日。

雨が降れば。雨よ、降れ。

降るといふ動詞は、右のやうに、ふらふりふるふれと變化する。こ

活用形

語幹

語尾

活用形の六種

のやうに、動詞が、その用ゐられる場合に應じて、その形を變へるのを、活用といひ、その變化した語形を、活用形といふ。  
ふるといふ動詞にあつては、その變化するのは、語の末の部分だけであつて、ふは變らない。この變化しない部分を、語幹といひ、らりるのやうな、變化する部分を、語尾といふ。  
降る時、降ります、降る日、降れば、降れ

(二) 活用形の六種

動詞の活用形をつゞき方や、いひあらはし方の關係から、左の六種に分ける。

(一) 未然形

動作もしくは存在の、まだ實現されてゐない場合、或は、實現されない場合のいひあらはしに用ゐられる形である。  
讀まう。讀まない。こ(來)よう。こ(來)ない。

(二) 連用形

用言に連ねるに用ゐられる形である。  
讀みまちがへる。讀みました。き(來)にくい。き(來)ました。  
連用形は、そのまゝ、名詞として用ゐられることがある。

行きは汽車、歸りは汽船。

このやうな場合の用法を、名詞法といふ。連用形は、また、文を全くいひきらずに、下に來る文につゞける時にも用ゐられる。  
雨も降り、風も吹く。  
本を讀み、字を習ふ。  
このやうな場合の用法を、中止法といふ。

(三) 終止形

文をいひきるに用ゐられる形である。

連用形

終止形

連體形

(四) 連體形

體言に連ねるに用ゐられる形である。  
本を讀む人。學校へ來る途中。

已然形

(五) 已然形

動作もしくは存在の、すでに實現してゐる場合、或は、實現する場合のいひあらはしに用ゐられる形である。  
本を讀めば、智慧がふえる。  
はやく來ればよい。

命令形

(六) 命令形

命令の意をあらはすに用ゐられる形である。  
本を讀め。はやくし(爲)ろ。すぐこ(來)い。  
命令形には、し(爲)ろ。こ(來)い。のやうに、ろ。い。のつくものもある。  
しかし、ろ。い。は、口語の場合に限られる。文語では、せ(爲)よ。こ(來)よ。のやうによがつく。口語文でも、よをつけることがある。

第四章 口語動詞の活用

活用の種類

(一) 活用の種類

口語の動詞の活用は、左の五種である。

- (一) 四段活用
- (二) 下一段活用
- (三) 上一段活用
- (四) 加行變格活用
- (五) 佐行變格活用



二四段活用

この活用に屬する口語の動詞は、その語尾が、五十音圖のアイウエの四段にわたつて活用するから、これを、四段活用といふ。

行	語幹	活用形
か		未然形
き		連用形
く		終止形
く		連體形
け		已然形
け		命令形

散歩に行かう。                      散歩に行きました。  
 散歩に行く。                        散歩に行く人。  
 散歩に行けば。                      散歩に行け。

次の動詞は、どう活用しますか。

書く。 動く。 押す。 貸す。 勝つ。 待つ。 笑ふ。 買ふ。 踏む。  
 休む。 通る。 釣る。 漕ぐ。 嗅ぐ。 喜ぶ。 結ぶ。 死ぬ。 有る。

次の例について、四段活用の動詞を挙げ、その活用をお示しなさい。

- 一、汽車をおりてから、まっすぐに、二・三丁行くと、左側に、お宮があります。
- 二、痛む足を引きずりながら、方々の名所を見てあるきました。
- 三、勝つも負けるも、時の運です。悲しむには及びませぬ。
- 四、傘はさしてゐましたが、雨がもるので、肩のあたりを、すつかりぬらしてしまいました。
- 五、値段を聞くと、五圓なら賣らうといひましたが、買はずに歸りました。

(三)下二段活用

この活用に屬する口語の動詞は、その語が、五十音圖のエの一段に

活用し、それになる。れの附いたものであるから、これを、下一段活用といふ。

活用形	語幹	
	蹴	受
未然形	け	け
連用形	け	け
終止形	ける	ける
連體形	ける	ける
已然形	けれ	けれ
命令形	け(ろよ)	け(ろよ)

許可を受けよう。許可を受けました。  
 許可を受けろ。許可を受けろ人。  
 許可を受ければ。許可を受けよ(受けろ)。

次の動詞は、どう活用しますか。

焼ける。 缺ける。 任せる。 浴びせる。 立てる。 育てる。 重ねる。

寝る。 数へる。 考へる。 止める。 越える。 枯れる。 植ゑる。  
 告げる。 交ぜる。 撫でる。 並べる。

口語の下一段活用の動詞のうち、次の各行に屬するものは、假名遣をあやまり、また活用を違へやすいから、注意を要する。

活用形	行			
	ア行	ハ行	ヤ行	ワ行
未然形	え	へ	え	ゑ
連用形	え	へ	え	ゑ
終止形	える	へる	える	ゑる
連體形	える	へる	える	ゑる
已然形	えれ	へれ	えれ	ゑれ
命令形	え(ろよ)	へ(ろよ)	え(ろよ)	ゑ(ろよ)

以上の中、ア行に屬するものは、得るの一語であるから、ハ・ヤ・ワ三行のものだけがつかひわけられればよいのであるが、ハ行に屬するものは、きはめて多いから、次のヤ・ワ二行に屬する普通のものを心得て、他の發音のまぎれやすいものは、ハ行のものとするがよい。

ヤ行

おびえる・覺える・消える・聞える・越える・肥える・凍える・互える・冷える・榮える・聳える・絶える・煮える・生える・殖える・吠える・見える・燃える・萌える。

ワ行

植ゑる・据ゑる・飢ゑる。

次の例について、下一段活用の動詞を擧げ、その活用をお示しなさい。

一、岩の間を流れる水が、さら／＼と音を立ててゐる。

二、おぢいさんが、松を植ゑたり、石を据ゑたりしたので、うちの小さな庭も、大分様子が變つて來た。

三、猫をあひてにして、ふざけてゐた子供も、いつのまにか寢てしまつたと見える。

四、かぐや姫は、月の明るい晩には、月をながめて、何か考へてゐるやうでした。

五、月は、今、雲から出て、はなれて行きます。しかし、じつと見つめてゐると、雲がとんで行くやうに見えます。

上一段活用

〔四〕上一段活用

この活用に屬する口語の動詞は、その語が、五十音圖のイの一段に活用し、それに、れ・の・附いたものであるから、これを、上・一・段・活・用・と  
し・ふ。

活用形	語幹	
	起	(見)
未然形	き	み
連用形	き	み
終止形	きる	みる
連體形	きる	みる
已然形	きれ	みれ
命令形	き(ろよ)	み(ろよ)

はやく起きよう。      はやく起きました。  
 はやく起きる。      はやく起きる人。  
 はやく起きれば。      はやく起きよ(起きる)。

次の動詞は、どう活用しますか。

生きる。着る。落ちる。強ひる。干る。報いる。ある。射る。  
 煮る。似る。ねちる。綻びる。亡びる。借りる。懲りる。  
 足りる。

口語の上一段の動詞で、假名遣をあやまりやすいのは、老、悔、い、報、い、の、い、で、あ、る。この三語は、ヤ行の動詞であるから、い、の、假、名、で、あ、る、こ、と、を、注、意、す、る、が、よ、い。

次の例について、上一段活用の動詞を挙げ、その活用をお示しなさい。

- 一、命を捨てて、國に報いる。
- 二、潮が、すっかり干てしまった。
- 三、沖の方を見ると、潮がだんく、満ちて来て、雲間を洩れる夕日の光が、眼を射るやうだ。
- 四、猿も木から落ちるといふ諺は、上、手、の、手、か、ら、水、が、漏、れ、る、と、い、ふ、諺、に、似、て、あ、る。
- 五、善い事を見たり聞いたりすると、この世に生きてあるかひがあると思ふ。

加行變格活用

〔五〕加行變格活用

この活用に屬する口語の動詞は、その語が、五十音圖のイ・ウ・オの三段に活用し、また、そのウ段に、れ・の附いた、特殊のものであり、かつ、カ行に限られたものであるから、これを、加行變格活用といふ。

語幹	活用形				
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(來)	こ	き	くる	くる	くれ
					こ (よい)

はやくこよう。      はやくきました。  
 はやくくる。      はやくくる人。  
 はやくくれば。      はやくこい(こよ)。

加行變格活用に屬する動詞は、來(くる)といふ一語だけである。

佐行變格活用

〔六〕佐行變格活用

この活用に屬する口語の動詞は、その語が、五十音圖のイ・ウ・エの三段に活用し、また、そのウ段に、れ・の附いた、特殊のものであり、かつ、サ行に限られたものであるから、これを、佐行變格活用といふ。

語幹	活用形				
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(爲)	せし	し	する	する	すれ
					せし (よい)

勉強をしない(勉強をせぬ)。      勉強をしました。  
 勉強をする。      勉強をする人。  
 勉強をすれば。      勉強をしる(勉強をせい)。

佐行變格活用に屬する動詞は、するといふ語、および、名詞や漢語などとするのが、熟合して出來た、罰する、察する、論ずる、議論する、登山

する。こ。ち。ず。る。重。ん。ず。る。の。類。で。あ。る。  
未。然。形。が。し。と。せ。と。の。二。つ。に。わ。か。れ。る。が。こ。れ。は。し。な。い。と。せ。ぬ。の。や  
う。に。な。い。に。つ。く。時。に。は。し。ぬ。に。つ。く。時。に。は。せ。な。の。で。あ。る。  
命。令。形。も。し。と。せ。と。の。二。つ。に。な。る。が。こ。れ。は。る。に。つ。く。時。と。い。よ。に  
つ。く。時。と。に。よ。つ。て。異。な。る。の。で。あ。る。

別 口語動詞の識

〔七〕口語動詞の識別

口語動詞五種のうち、識別の必要のあるのは、四段活用上一段活用  
下一段活用の三活用である。これを識別するには、動詞にない  
いふ語を添へて、打消の意をいひあらはしてみればよい。その時  
に、ないのつく動詞の形が、

ア段に終るものならば、四段活用(行かない、知らない)。  
イ段に終るものならば、上一段活用(見ない、起きない)。

エ段に終るものならば、下一段活用(受けない、蹴ない)。  
と心得てよい。ないのかはりに、同じく打消の意をいひあらはす  
ぬをつけて見た場合も、同様である。

第五章 文語動詞の活用

活用の種類

〔一〕活用の種類

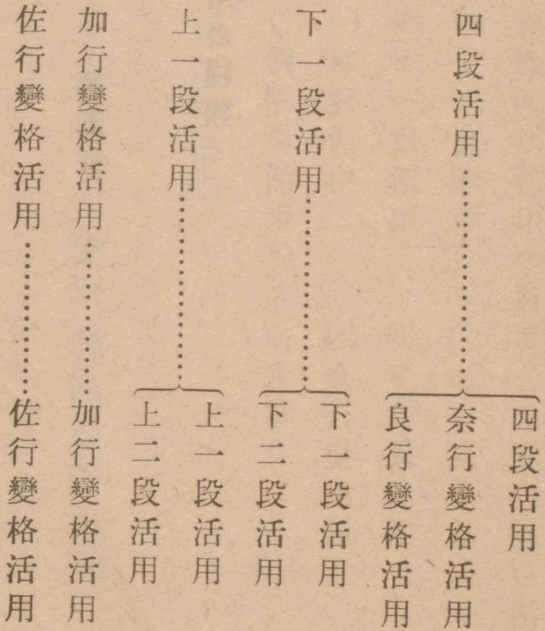
文語の動詞の活用は、左の九種である。

- (一) 四段活用
- (二) 奈行變格活用
- (三) 良行變格活用
- (四) 下一段活用
- (五) 下二段活用
- (六) 上一段活用
- (七) 上二段活用
- (八) 加行變格活用
- (九) 佐行變格活用

今、口語動詞の活用の種類と文語動詞の活用の種類を對照せしめ  
てみると、左の如くである。

口語

文語



四段活用

二四段活用

口語において四段活用に屬する動詞(死ぬ・有る)の二語を除いては、

文語においても、四段に活用する。

野に行かむ。野に行きたり。

野に行く。野に行く人。

野に行けば。野に行け。

奈行變格活用

二三奈行變格活用

この活用に屬する文語の動詞は、その語尾が、五十音圖のアイウエの四段にわたつて活用することは、四段活用と同じであるが、連體形と已然形とが、四段活用と形を異にし、かつ、この類のものは、ナ行に限られてゐるから、これを、奈行變格活用といふ。

この活用に屬するものは、死ぬ・往ぬの二語だけである。死ぬは、普通文では、四段活用として用ゐてもよいことになつてゐる。

死	活用形
な	未然形
に	連用形
ぬ	終止形
ぬる	連體形
ぬれ	已然形
ね	命令形

鳥は死なむ。 鳥は死にき。  
 鳥も死ぬ。 鳥の死ぬる時。  
 鳥も死ぬれば。 鳥も死ぬね。

良行變格活用

〔四〕良行變格活用

この活用に屬する文語の動詞は、その語尾が五十音圖のアイウエの四段にわたつて活用することは、四段活用と同じであるが、終止形が、りで終る點で、四段活用と異なり、かつ、この類のものは、ラ行に限られてゐるから、これを、良行變格活用といふ。

この活用に屬するものは、有・居・侍りの三語だけである。  
 居りは普通文では、四段活用として用ゐてもよいことになつてゐる。  
 侍りは、普通文では用ゐられない。

有	活用形
ら	未然形
り	連用形
り	終止形
る	連體形
れ	已然形
れ	命令形

思ふことあらむ。 思ふことありて。  
 思ふことあり。 思ふことある人。  
 思ふことあれば。 思ふことあれ。  
 有りと他語との熟合したものに、善かり・早かり・靜かなり・穩かなり・泰然たり・悠然たりの類の語がある。 これらも、やはり良



行變格に活用する。

下二段活用

〔五〕下一段活用

口語の下一段活用に屬する動詞のうちで、文語でも下一段に活用するのは、蹴るといふ一語だけである。

鞠をけむ。

鞠をけぬ。

鞠をける。

鞠をける人。

鞠をければ。

鞠をけよ。

文語では、命令形によがつく。

下二段活用

〔六〕下二段活用

口語の下一段活用に屬する動詞蹴るの一語を除いては、文語においては、下二段に活用する。

この活用に屬する文語の動詞は、その語尾が、五十音圖のウエの二段に活用し、また、そのウ段に、れの附いたものであるから、これを、下二段活用といふ。

活用形	語幹	受
未然形	(得)	け
連用形		け
終止形		く
連體形		くる
已然形		くれ
命令形		け(よ)

許可をえむ。

許可をえたり。

許可をう。

許可をうる時。

許可をうれば。

許可をえよ。

文語では、命令形によがつく。

文語の下二段活用の動詞のうち、次の各行に屬するものは、活用の

行をあやまり、假名をまちがへやすいから、注意を要する。

行	活用形			
	未然形	連用形	終止形	連體形
ア行	(得)	え	え	うる
ハ行	教	へ	へ	ふる
ヤ行	覺	え	ゆ	ゆる
ワ行	植	ゑ	う	うる
				うれ
				え(よ)

以上の四行に屬する、發音の紛れやすいものうち、

ア行は、得の一語。

ヤ行は、癒ゆ・おびゆ・覺ゆ・消ゆ・聞ゆ・越ゆ・肥ゆ・凍ゆ・互ゆ・冷ゆ・榮ゆ・聳ゆ・絶ゆ・煮ゆ・生ゆ・殖ゆ・吠ゆ・見ゆ・燃ゆ・萌ゆ。

ワ行は、植う・据う・飢うの三語。

ハ行は、以上の外のものと心得てよい。

上一段活用

〔七〕上一段活用

口語の上一段活用に屬する動詞のうちで、文語でも上一段に活用するのは、左の諸語である。

カ行 着る。

ナ行 煮る・似る。

ハ行 干る・簸る。

マ行 見る(惟みる・顧みる・鑑みる)。

ヤ行 射る・鑄る。

ワ行 居る<sup>\*</sup>用ある<sup>\*</sup>率ある<sup>\*</sup>。

月を見む。

月を見き。

月を見る。  
月を見る人。  
月を見れば。  
月を見よ。

文語では、命令形によがつく。

上二段活用

〔八〕上二段活用

口語の上二段に屬する動詞(前項以外の)は、上二段に活用する。  
この活用に屬する文語の動詞は、その語尾が五十音圖のイウの二段に活用し、またそのウ段にるれの附いたものであるから、これを上二段活用といふ。

起	語幹	活用形
き		未然形
き		連用形
く		終止形
くる		連體形
くれ		已然形
き(よ)		命令形

はやく起きむ。  
はやく起く。  
はやく起くれば。  
はやく起きたり。  
はやく起くる人。  
はやく起きよ。

文語では、命令形によがつく。

加行變格活用

〔九〕加行變格活用

口語の加行變格活用と文語の加行變格活用との異なる點は、文語にあつては、終止形がくととなるにある。

(來)	語幹	活用形
こ		未然形
き		連用形
く		終止形
くる		連體形
くれ		已然形
こ(よ)		命令形

はやくこむ。  
はやくきぬ。

はやくく。  
はやくくれば。  
はやくくよ。  
はやくくる人。

文語では、命令形によがつく。

佐行變格活用

〔一〇〕佐行變格活用

口語の佐行變格活用と文語の佐行變格活用との異なる點は、文語にあつては、未然形がせ、終止形がす、命令形がせとなる、この三つである。

(爲)	活用形	語幹				
	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
せ	し	す	する	すれ	せ(よ)	

勉強をせむ。

勉強をしき。

勉強をす。

勉強をする人。

勉強をすれば。

勉強をせよ。

文語では、命令形によがつく。

文語の佐行變格活用に屬する動詞は、口語の條に挙げたものの外に、おはすといふ語があるが、この語は、普通文には用ゐられない。

文語動詞の識別

〔一一〕文語動詞の識別

文語の動詞九種のうち、

奈行變格活用

死ぬ往ぬの二語。

良行變格活用

有り居り侍りの三語。(ありの他語と熟合したものも、これに準ずる。)

下一段活用

蹴るの一語。

上一段活用

着る煮る似る干る簸る見る射る鑄る居る用

る率るの十一語。

加行變格活用 くる(來)の一語。

佐行變格活用 する(爲)の一語。(すの他語と熟合したものも、これに準ずる。)

以上のものは、紛れることが少い。残りの四段活用下二段活用上二段活用の三活用だけが注意を要する。これを識別するには、動詞にずといふ語を添へて打消の意をいひあらはしてみればよい。その時に、ずのつく動詞の形が、

ア段に終るものなれば四段活用 (行かず知らず)

イ段に終るものなれば上二段活用 (起きず老いず)

エ段に終るものなれば下二段活用 (受けず得ず)

と心得てよい。

次の例について、動詞を擧げ、その活用をお示しなさい。

一、昔、一匹の獅子、森の中にて眠りしに、後の暗きやぶかげより、大いなる蛇出て来て、獅子のからだにまきつきたり。

二、獅子は、おどろきて、ふりはなさむとしたれど、蛇は、ますますかたくしめつけたり。

三、獅子の目は火の如くに燃え、怒りてさけぶ聲には、百獸おそれてにげまどへど、蛇は、ますます強くしめつけたり。今や、獅子の息は絶えむとす。

四、この時、こゝに來りしは、一人の武士なり。武士の馬は、おどろきて、後足にて立上り、おそれて、そこに近づかむともせず。

五、武士は、太刀をぬきて、馬よりとび下り、満身の力をこめて、蛇の胸中目かけて打下せば、蛇は眞二つとなりて、大地にのたうちまはりてたふれたり。

六、歴史は長し、七百年、興亡すべて夢に似て、英雄、墓は、苔むしぬ。建長。

圓覺、古寺の、山門高き松風に、昔の音やこもるらむ。  
七、眼を閉ぢて、古を戀ふれば、綿々の情盡くることなし。

### 第六章 形容詞の活用形

活用形・語幹・語尾

#### (一)活用形語幹語尾

活用形

形容詞も、その用ゐる方によつて語形が變る。今口語に例をとれば、  
よ・く・見・え・ま・す。それがよ・い。よ・い・人。それでもよ・け・れ・ば。

語幹  
語尾

よ・いといふ形容詞は、右のやうに、く・い・け・れと變化する。このやうに、形容詞が、その用ゐられる場合に應じて、その形を變へるのを活用といひ、その變化した形を、活用形といふ。よ・いといふ語の、變化しない部分、すなはち、よの如きものを、語幹といひ、變化する部分、すなはち、く・い・け・れの如き部分を、語尾といふことは、動詞の場合と同

様である。

活用形の五種

#### (二)活用形の五種

形容詞の活用形を、つゞき方やいひあらはし方の關係から、左の五種に分ける。

##### (一)未然形

性質もしくは状態について、これを假定的にいひあらはすに用ゐられる形である。

口語では、未然形の活用を缺く。文語には、  
\*天・氣・よ・く・ば、山に登らむ。\*嬉・し・く・ば、聲をあげて歌へ。  
といふいひ方がある。このよ・く・嬉・し・くは、未然形である。

連用形

##### (二)連用形

第六章 形容詞の活用形

副詞法

用言に連ねるに用ゐられる形である。

高・く・聳・える。お・も・し・ろ・く・騒・ぐ。

右の高・く・お・も・し・ろ・く・の類は、副詞と同じやうに、用言の上について、その意味を修飾する役目をもつから、このやうな場合の用法を、副詞法といふ。

中止法

連用形は、また、文をいひきらずに、下に來る文にいひつゞける時にも用ゐられる。

山が・高・く、水が・清・い。私・事・は・軽・く、公・事・は・重・い。

右のやうな場合の用法を、中止法といふ。

終止形

(三)終止形

文をいひきるに用ゐられる形である。

花が・赤・い。夜は・淋・しい。

連體形

(四)連體形

體言に連ねるに用ゐられる形である。

黒・い・岩。美・し・い・花。

已然形

(五)已然形

性質もしくはは状態について、これを既定的にいひあらはすに用ゐられる形である。

天・氣・が・よ・け・れ・ば、山に・ま・り・ま・す。

嬉・し・け・れ・ば、高・い・聲・で・お・歌・ひ・な・さ・い。

口語では、右のやうな形を、假定的のいひあらはしにも用ゐるが、文語では、未然形を假定に、已然形を既定に用ゐる。

第七章 口語形容詞の活用

活用の種類

(一)活用の種類

口語形容詞の活用を、左の二種に分ける。

- (一)久活用
- (二)志久活用

久活用

(二)久活用

寒	活用形
	語幹
○	未然形
く	連用形
い	終止形
い	連體形
けれ	已然形

寒くなりまりました。

風が寒い。

寒い風ですね。

寒ければ、綿入をお着なさい。

右のやうに、くいけれと活用する類を久活用といふ。

志久活用

(三)志久活用

くや	活用形
	語幹
○	未然形
しく	連用形
しい	終止形
しい	連體形
しけれ	已然形

くやしく思ひます。

非常にくやしい。

くやしい時。

くやしければ、奮發なさい。

右のやうに、しくしいしけれと活用する類を、志久活用といふ。

次の形容詞は、どう活用しますか。



黒い。細長い。ばか／＼しい。おもしろい。やさしい。さうざうしい。早い。遠い。

次の例について、形容詞を擧げ、その活用をお示しなさい。

- 一、赤黒い、毒々しい色の花が、今をさかりと咲いてゐる。
- 二、この頃は、寒くなく、暑くなく、まことに心もちのよい季節です。
- 三、坂になつた路の土が、砥の粉のやうに、白く乾いてゐる。寂しい山間の町だから、路には、石ころも多い。
- 四、いそがしければいそがしいほど、ゆつくりと仕事をすることがよいといふのは、そつつかしい人に對する、よい教訓です。
- 五、物事に感じの深い藝術家のなかには、味覺がすぐれてゐて、とかく、料理加減に口やかましい人があるものだ。

### 第八章 文語形容詞の活用

#### 活用の種類

##### 〔一〕活用の種類

文語形容詞の活用も、左の二種に分ける。

- (一) 久活用
- (二) 志久活用

#### 久活用

##### 〔二〕久活用

語幹	活用形
高	未然形
く	連用形
く	終止形
し	連體形
き	已然形
けれ	

山高くば、風強からむ。 山、高く聳ゆ。 山高し。

高き山に登る。 山高ければ、風強し。

志久活用

〔三〕志久活用

樂	活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
	語幹	しく	しく	し	しき	しけれ

樂しくば歌はむ。 樂しく歌へり。 われ等は樂し。  
 樂しき旅。 樂しければ踊りぬ。

次の形容詞は、どう活用しますか。

黒し。 細長し。 なつかし。 おもしろし。 早し。 遠し。

次の例について、形容詞を擧げ、その活用をお示しなさい。

- 一、白き花の、美しく見ゆるは、何の花ならむ。
- 二、遠く鳴る潮の音を聞きて、淋しき心堪へ難し。
- 三、夕の雲、淡く消えて、東の山の端、黒くなりゆく。
- 四、樂しき一日の會、やうやく終りに近づきて、にぎは、しき奏樂の音、堂をゆるがす。
- 五、逗子の砂山、草枯れて、夕日さびしく残るなり。 沖の片帆の影長く、小坪の浦は、ほど近し。

第九章 動詞・形容詞の音便

音便

〔一〕音便

語の上についた、音の變化の現象のうちで、書き記す場合にも、その通りに書きあらはす習慣の成立つてゐる類のものを、音便といふ。

音便の四種

動詞・形容詞の音便を、左の四種に分ける。

- (一) イ音便
- (二) ウ音便
- (三) 撥音便
- (四) 促音便

イ音便

〔二〕イ音便

カ行四段の動詞の連用形の語尾きぎは、その下にてたまたはたり  
の来る時、發音の變ることがある。その變化のいで書きあらはさ  
れる類のものを、イ音便といふ。

書きて → 書いて (文語・口語)

書き (書きた) → 書いた (口語)

書きたり → 書いたり (文語・口語)

漕ぎて → 漕いで (文語・口語)

漕ぎ (漕ぎた) → 漕いだ (口語)

漕ぎたり → 漕いだり (文語・口語)

ぎがイ音便となる時、その下のたたりはでだたりとなる。  
文語の悲しいかな、楽しいかなの如きも、悲しき、楽しきのイ音便で  
ある。

ウ音便

〔三〕ウ音便

ハ行四段の動詞の連用形の語尾ひは、その下にてたまたはたりの  
来る時、發音の變ることがある。その變化のうで書きあらはされ  
る類のものを、ウ音便といふ。

買ひて → 買うて (文語・口語)

買ひ (買ひた) → 買うた (口語)

買ひたり → 買うたり (文語・口語)

形容詞にあつては、連用形の語尾のくが、いろくの場合において、  
ウ音便になることがある。

よく―↓よう (文語・口語)  
 よろしく―↓よろしく (文語・口語)

しかし、口語において、ウ音便の行はれてゐるのは、主として關西地方である。標準語では、買うて買うたといはず、買つて買つたといふ。また、形容詞のウ音便も、下にございますといふ語の來る場合に限られてゐる。

撥音便

〔四〕撥音便

死ぬといふ動詞の連用形の語尾に、ハ行四段の動詞の連用形の語尾び、マ行四段の動詞の連用形の語尾みは、その下にたまたはたりの來る時、發音の變ることがある。その變化の、んで書きあらはされる類のものを、撥音便といふ。

〔死にて〕↓死んで(文語・口語)

死に(死にた)↓死んだ(口語)

死にたり↓死んだり(文語・口語)

飛びて↓飛んで(文語・口語)

飛び(飛びた)↓飛んだ(口語)

飛びたり↓飛んだり(文語・口語)

頼みて↓頼んで(文語・口語)

頼み(頼みた)↓頼んだ(口語)

頼みたり↓頼んだり(文語・口語)

この場合には、下に來るてたたりは、でだだりとなるのが常である。

促音便

〔五〕促音便

タ行四段の動詞の連用形の語尾ち、ハ行四段の動詞の連用形の語尾ひ、ラ行四段の動詞、ラ行變格の動詞の連用形の語尾りは、その下

にて、たまたはたりの來る時、發音の變ることがある。その變化の、つで書きあらはされる類のものを促音便といふ。

立ちて ↓ 立つて (文語・口語)

立ち(立ちた) ↓ 立つた (口語)

立ちたり ↓ 立つたり (口語)

敬ひて ↓ 敬つて (文語・口語)

敬ひ(敬ひた) ↓ 敬つた (口語)

敬ひたり ↓ 敬つたり (口語)

知りて ↓ 知つて (文語・口語)

知り(知りた) ↓ 知つた (口語)

知りたり ↓ 知つたり (口語)

口語の行つて行つたも、また行きが促音便になつたものである。

助動詞の場合にも、音便の現象の生ずることがある。大體、動詞・形

容詞の音便に準ずるものと心得てよい。

次の例について、音便を説明なさい。

- 一、雨が降りこんだと見えて、疊が、すつかりしめつてある。
- 二、ある日、お母さんは、親類へおいでになつた歸りに、お伽噺の本を買つて來て下さつた。かういふ本を讀んでいたゞくのが、その頃の私の楽しみであつた。
- 三、京都へはじめて往つた時は、十二月で、その時分は、七條の停車場も、今より小さかつたし、烏丸の通りだの、四條の通りだのが、ずつと、今より狭かつた。
- 四、\*才拙うして、學淺し。天を仰いで長嘆すること、これを久しうす。
- 五、\*各位の御來臨を辱うして、光榮の至りにたへず。謹んで、感謝の意を表明す。

### 第十章 助動詞

#### 助動詞の種類

##### 〔一〕助動詞の種類

助動詞は、名詞・代名詞・動詞もしくは他の助動詞の下に附いて、そのいひあらはし方を助けるものであるから、これを、その所屬にしたがつて分類すると、(一)體言につくもの、(二)動詞助動詞の未然形につくもの、(三)動詞助動詞の連用形につくもの、(四)動詞助動詞の連體形につくもの、(五)特殊のもの五種になる。

#### 助動詞の活用

##### 〔二〕助動詞の活用

助動詞は、これを、その活用にしたがつて分類すると、(一)動詞と同じやうな活用を有するもの、(二)形容詞と同じやうな活用を有するもの、(三)特殊の活用の形式をもつてゐるもの、(四)活用の形式をもつてゐないものの四種になる。

### 第十一章 口語の助動詞

#### 〔一〕體言につく助動詞

##### (一)だ

正行は、忠臣で、孝子である。  
わが國は、五大強國の一つだ。  
だは、次のやうに活用する。

○	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
		で	だ	○	○	○

體言につく助動詞  
だ

活用

だ・だ  
だ・ら  
だ・ら  
だ・ら  
た・う  
た・う

だの連用形であらう。あつたと熟合したものに、だらう。だつたなどがある。  
明日は雨だらう。正成は忠臣だつた。

(二)です

で  
す  
活  
用

あの樹は櫻でせう。あれは櫻でした。あれは櫻の樹です。ですは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
でせ	でし	です	○	○	○

(三)なり

な  
り  
活  
用

月夜なら(ば)よいのに。私なり、妹なり、どちらか参ります。

手紙なりとも、よこせばよい。健全な兒童。

なりは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なら	なり	なり	な	○	○

以上のたですなりは、物事をこれと指し定めていひあらはすに用ゐられる語であるから、これを、指定の助動詞といふ。ただし、ですは、特に敬讓のいひあらはしにのみ用ゐられる。

(二)動詞助動詞の未然形につく助動詞

(一)れるられる

尊ばれよう。譽められよう。

動詞・助動詞の未然形につく助動詞  
れる  
られる

指定の意をあらはす

活  
用

活用

尊ばれた。 譽められた。  
 尊ばれる。 譽められた。  
 尊ばれる人。 譽められる人。  
 尊ばれば。 譽められれば。  
 尊ばれる。 譽められる。  
 尊ばれるは、共に下一段に活用する。

接續の關係

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
られ	られ	られる	られる	られれ	られ(ろ)
れ	れ	れる	れる	れれ	れ(ろ)

れるは、四段活用の動詞の未然形に、られるは、その以外の動詞の未然形につく。他の助動詞につく場合も、これに準ずる。

受身をあらはす

可能をあらはす

敬意をあらはす

せ・せる・させる

れる・られるは、他から或動作をしむけられる意味をあらはすに用ゐられる語であるから、これを、受身の助動詞といふ。  
 れる・られるは、また、或事をする事が出来るといふ意味をあらはすにも用ゐられる。この場合には、これを、可能の助動詞といふ。「行くことが出来る」「數へることが出来る」といふ意を「行かれる」「數へられる」といふ。「行かれる」は「行ける」ともなる。可能の場合には、命令形を缺く。  
 れる・られるは、また、「先生は歸られました」「先生は休んでられます」のやうに、動作を敬つていふにも用ゐられる。この場合には、これを、敬讓の助動詞といふ。

(二) せ・せる・させる

書かせよう。

止めさせよう。



活用

書か<sup>せ</sup>た。  
 書か<sup>せ</sup>せる。  
 書か<sup>せ</sup>せる人。  
 書か<sup>せ</sup>れば。  
 書か<sup>せ</sup>せる。  
 止め<sup>せ</sup>た。  
 止め<sup>せ</sup>せる。  
 止め<sup>せ</sup>せる人。  
 止め<sup>せ</sup>れば。  
 止め<sup>せ</sup>せる。  
 せ<sup>る</sup>は、共に下一段に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
せ	せ	せる	せる	せれ	せ(ろ)
させ	させ	させる	させる	させれ	させ(ろ)

接續の關係

せ<sup>る</sup>は、四段活用の動詞の未然形に、せ<sup>る</sup>は、四段活用以外の動詞の未然形につく。他の助動詞につく場合も、これに準ず

使役をあらはす

ない

活用

る。  
 せ<sup>る</sup>させ<sup>る</sup>は、他のものをして或動作をさせる意味をあらはすに用ゐられる語であるから、これを、使役の助動詞といふ。

(三) ない

鳴か<sup>な</sup>くな<sup>つ</sup>た。 鳴か<sup>な</sup>い(ぬ)。  
 鳴か<sup>な</sup>い(ぬ)鳥。 鳴か<sup>な</sup>けれ(ね)ば。  
 ないは、久活用に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
○	なく	ない	ない	なけれ
○	○	(ぬ)	(ぬ)	(ね)

打消をあらはす

ないは、打消の意味をあらはすに用ゐられる語であるから、これを、打消の助動詞といふ。ぬねを用ゐるのは、主として關西地方である。ぬは、んとなることが多い。

よ・う・う

(四)う・よう

字を書かう。試験を受けよう。  
本を讀まう。勉強をしよう。

接續の關係  
活用

未來をあらはす

う・ようは、終止形が存するばかりである。  
うは、四段活用の動詞の未然形につき、ようは、四段活用以外の動詞の未然形につく。他の助動詞につく場合も、これに準ずる。  
う・ようは、動作や存在の起るのが、未來の時に屬する意をあらはす語であるから、これを、未來の助動詞といふ。

動詞・助動詞の連用形につく助動詞

(三)動詞助動詞の連用形につく助動詞

活用

た

(一)て

人がたづねて來た。花が咲いてゐます。  
てには、活用がない。連用形のみである。

活用

(二)た

火も消えたらう。見たり、聞いたりしたこと。  
火事が、よく見えた。たづねて來た人。  
たは、次のやうに活用する。

たら	未然形	たり	連用形	た	終止形	た	連體形	○	已然形
----	-----	----	-----	---	-----	---	-----	---	-----

過去をあらはす

たらは「手紙を見たら歸るだらう」のやうにも用ゐられる。  
てたは、動作や存在の、過去の時に起つた意をあらはす語であるから、これを、過去の助動詞といふ。

(三) たい

水が飲みたくなつた。 水が飲みたい。  
水の飲みたい人。 水が飲みたければ。  
たいは、久活用に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
○	たく	たい	たい	たけれ

たいは、願望の意味をあらはすに用ゐられる語であるから、こ

れを願望の助動詞といふ。

連用形のたくは、あらうと熟合して、「飲みたからう、あつたと熟合して、飲みたかつた」といふやうになる。

(四) ます

雨が降りませう。 雨が降りました。  
雨が降ります。 雨の降ります時には。  
雨が降りますれば。 いらつしやいませ(まし)。  
ますは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ(まし)

活用

ます

活用

たい

願望をあらはす

敬讓の意をあらはす

ませぬ  
ませぬ  
ませぬ

ますは、丁寧ないひあらはしに用ゐられる語であるから、これを敬讓の助動詞といふ。  
ますは、助動詞ないにはつゝかない。打消の意をあらはすには、未然形のませぬをつけてませぬといふ。ぬはんとなるから、ませぬはませんともなる。

動詞・助動詞の終止形につく助動詞  
らしい

〔四〕動詞助動詞の終止形につく助動詞

らしい

大事件があるらしく見える。  
かなり遠方から來るらしい。  
らしいは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
-----	-----	-----	-----	-----

○	らしく	らしい	○	○
---	-----	-----	---	---

らしいは、或事がらを推量する意をあらはすに用ゐられる語であるから、これを推量の助動詞といふ。

推量をあらはす

特殊の助動詞

まい

〔五〕特殊の助動詞

まい

讀むまい。 あるまい。

右のやうに、まいは、四段活用の動詞につく時は、その終止形につく。

盡きまい。 消えまい。 来まい。 爲まい。

右のやうに、まいは、四段活用以外の動詞につく時は、その未然形につく。

未然形につく

終止形につく

活用  
打消をあらはす

まいには、活用がない。  
まいは、打消の助動詞である。

次の例について、助動詞を挙げ、それを説明なさい。

- 一、もう四・五日すれば、起きられるでせう。
- 二、冬が来たたら、この邊の道は、霜どけで大變です。
- 三、貧しい人々のあはれな様子に心をうたれまして、これから、わがままの念は起すまいと決心しました。
- 四、鼠は、猫に追はれ、猫は、犬に追つかけられます。かういふのが、世の中の有様です。
- 五、私は、病人に薬を飲ませようと思つて、いそいで歸つて来たのです。
- 六、わたしは、いつもお経を讀まうと思ふのだが、机に向かふと、つい晝がきたたくてかきたくて、たまらなくなつてしまふ。
- 七、今夜は、月がよいので、うかれ出た人が多いのでせう。川べりを往つたり來たりする足音が絶えません。

### 第十二章 文語の助動詞

體言につく助動詞

(一)體言につく助動詞

(一)なり

質素ならば。 質素なりき。  
 質素なる生活。 質素なれば。  
 なりは、良行變格に活用する。 質素なれ。

活用

未然形	なり	連用形	なり	終止形	なり	連體形	なる	已然形	なれ	命令形	なれ
-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----

指定の意をあらはす  
用言の連體形につくなり

用言の終止形につくなり

た・り

活用

(二) たり

代表者たれば。 代表者たりき。 代表者たり。

代表者たれば。 代表者たれば。

たりは、良行變格に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
-----	-----	-----	-----	-----	-----

たら	たり	たり	たる	たれ	たれ
----	----	----	----	----	----

たりも、指定の助動詞である。

指定の意をあらはす

動詞・助動詞の未然形につく助動詞

ら・る・る

活用

(二) 動詞助動詞の未然形につく助動詞

(一) ら・る

尊ばれむ。 譽められむ。

尊ばれたり。 譽められたり。

尊ばる。 譽めらる。

尊ばるゝ人。 譽めらるゝ人。

尊ばるれば。 譽めらるれば。

尊ばれよ。 譽められよ。

る・らるは、共に下二段に活用する。

接続の関係

受身をあらはす  
可能をあらはす  
敬意をあらはす

さす  
す

るは、四段活用奈行變格活用良行變格活用の動詞の未然形につき、らるは、上記以外の動詞の未然形につく。他の助動詞につく場合もこれに準ずる。  
る。らるが、受身の助動詞であり、また、これが可能の助動詞として、敬讓の助動詞として用ゐられることは、口語のれるらると同様である。

未然形	れ	られ
連用形	れ	られ
終止形	る	らる
連體形	るる	らるる
已然形	るれ	らるれ
命令形	れ(よ)	られ(よ)

(二) すす

活用

接続の関係

聞かせむ。  
聞かせたり。  
聞かす。  
聞かする人。  
聞かすれば。  
聞かせよ。  
得させむ。  
得させたり。  
得さす。  
得さする人。  
得さすれば。  
得させよ。  
すすは、共に下二段に活用する。

未然形	せ	させ
連用形	せ	させ
終止形	す	さす
連體形	する	さする
已然形	すれ	さすれ
命令形	せ(よ)	させ(よ)

すは、四段活用奈行變格活用良行變格活用の動詞の未然形に

使役をあらはす  
敬意をあらはす

いむ

活用

つき、さすは、上記以外の動詞の未然形につく。他の助動詞につく場合も、これに準ずる。  
す、さすは、使役の助動詞である。また、敬讓の助動詞としても用ゐられる。

(三) しむ

知らしめむ。 知らしめたり。 知らしむ。  
知らしむる人。 知らしむれば。 知らしめよ。  
しむは、下二段に活用する。

未然形	しめ
連用形	しめ
終止形	しむ
連體形	しむる
已然形	しむれ
命令形	しめ(よ)

使役をあらはす  
敬意をあらはす

ず

活用

打消をあらはす

しむは、使役の助動詞である。また、敬讓の助動詞としても用ゐられる。

(四) ず

知らずばよし。 雨、止まず降る。 何も聞えず。  
物言はぬ人。 音もせねば。  
ずは、次のやうに活用する。

未然形	ず
連用形	ず
終止形	ず
連體形	ぬ
已然形	ね
命令形	○

ずは、打消の助動詞である。



(五) ざり

思はざらば。 思はざりき。 思はざり。  
 思はざる人。 思はざれば。 思はざれ。  
 ざりは、良行變格に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ

ざりも、打消の助動詞である。

(六) じ

遠くは行かじ。 見る人もあらじ。  
 じは、活用しない。

じも、打消の助動詞である。

(七) む

雪降らむ。 雪の降らむ時。 雪こそ降らめ。  
 むは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
○	○	む	む	め	○

むは、未來の助動詞である。

(八) まし

うれしからまし。 聞かましものを。 知らましかば。

ざり

活用

打消をあらはす

じ

活用

打消をあらはす

む

活用

未來をあらはす

まし

活用

ましは、次のやうに活用する。

○	未然形
○	連用形
まし	終止形
まし	連體形
ましか	已然形
○	命令形

す 推量をあらは

ましは、推量の助動詞である。

まほし

(九)まほし

活用

行かまほしくば。 行かまほしく思ふ。 行かまほし。

行かまほしき所。 行かまほしければ。

まほしは、志久活用に活用する。

未然形
連用形
終止形
連體形
已然形

す 願望をあらは

動詞・助動詞の連用形につく助動詞

(三)動詞助動詞の連用形につく助動詞 (一)き

活用

まほしは、願望の助動詞である。

人麿といふ人ありき。 人麿といひし人あり。

歌人にてありしかば。

きは、次のやうに活用する。

○	未然形
○	連用形
き	終止形
し	連體形
しか	已然形
○	命令形

加行變格活用  
および佐行變  
格活用の動詞  
につく場合

過去をあらは  
す

けり

活用

(三) けり

この助動詞が、加行變格活用の動詞につく時には、異例がある。連用形につくのは、ししかだけで、きは、この動詞にはつかない。なほ、ししかは、未然形にもつく。この助動詞が、佐行變格活用の動詞につく時にも、異例がある。きは、連用形につき、ししかは未然形につく。きは、過去の助動詞である。

時は秋なりけり。 白樂天といひける人。  
詩人にてありければ。  
けりは、次のやうに活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

○	○	けり	ける	けれ	○
---	---	----	----	----	---

けりも、過去の助動詞である。

(三) つ

活用

過去をあらは  
す

完了をあらは  
す

雪降りてば。 雪降りてけり。 雪降りつ。  
雪の降りつる日。 雪降りつれば。 雪降りてよ。  
つは、下二段に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
て	て	つ	つる	つれ	て(よ)

つは、動作や存在が、今終つたといふやうな意味をあらはすに

用ゐられる語であるから、これを完了の助動詞といふ。

(四)ぬ

風吹きなば。 風吹きにけり。 風吹きぬ。

風の吹きぬる日。 風吹きぬれば。 風よ、吹きぬ。

ぬは、奈行變格に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

接続の關係  
完了をあらはす

この助動詞は、奈行變格活用にはつかない。  
ぬも、完了の助動詞である。

活用

(五)たり

命を受けたらば。 命を受けたりき。 命を受けたり。

命を受けたる人。 命を受けたれば。 命を受けたれ。

たりは、良行變格に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

たりは、完了の助動詞である。

(六)たし

讀みたくなば。 讀みたくなし。 讀みたし。

讀みたきもの。 讀みたければ。

活用

完了をあらはす

たし

活用

たしは、久活用に活用する。

願望をあらはす

けむ

たしは、願望の助動詞である。

未然形	たぐ
連用形	たぐ
終止形	たし
連體形	たき
已然形	たけれ

(七) けむ

雨や降りけむ。

古にありけむ人。

悲しくこそありけむ。

けむは、次のやうに活用する。

未然形	○
連用形	○
終止形	けむ
連體形	けむ
已然形	けめ
命令形	○

活用

推量をあらはす

動詞・助動詞の終止形につく助動詞

活用

推量をあらはす

四 動詞助動詞の終止形につく助動詞

(一) らむ

月も出づらむ。 出づらむ月。 月も出づらめど。

らむは、次のやうに活用する。

未然形	○
連用形	○
終止形	らむ
連體形	らむ
已然形	らめ
命令形	○

らむは、推量の助動詞である。

ら・し

活用  
推量をあらはす

べ・し

活用

(二)らし

時雨降るらし。  
らしは、活用しない。  
らしは、推量の助動詞である。

(三)べし

行くべくば。行くべく見ゆ。行くべし。  
行くべき日なり。行くべければ。  
べしは、久活用に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
べく	べく	べし	べき	べけれ

推量の外に命令・可能・決意・義務をあらはす

べからず

まじ

べしは、推量の助動詞であるが、命令・可能・決意・義務などの意をもあらはす。

速かに退去すべし。(命令)

千里の道もなほ行くべし。(可能)

不俱戴天の仇、必ず討つべし。(決意)

約束は履行すべし。(義務)

「出品物に手を觸るべからず」などのべからも、べしの連用形と動詞ありとの熟合した助動詞である。普通文では、べからずといふ場合にのみ用ゐられる。

(四)まじ

許すまじくば。許すまじく思はる。許すまじ。  
許すまじき人。許すまじければ。

活用

まじは、志久活用に活用する。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ

まじは、打消の助動詞であるが、推量して打消す意味をあらはす。

特例

以上の終止形につく助動詞が、良行變格活用の動詞および、これと活用を同じくする助動詞につく時には、その連體形につくのを特例とする。

特殊の助動詞

〔五〕特殊の助動詞

(一)り

出發せり。 咲けり。 出發せる船。 咲ける花。

りは、良行變格活用に活用するが、普通文に用ゐられる形は、り(終止形)る(連體形)だけである。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
(ら)	(り)	り	る	(れ)

りは、左行變格活用の未然形、四段活用の已然形にのみつく。りは、完了の助動詞である。

接続の関係

完了をあらはす

ごとし

(二)ごとし

月、鏡のごとくば。 月、鏡のごとくなり。 月、鏡のごとし。 鏡のごとき月。

活用

ごとしは、久活用に活用するが、已然形を缺く。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ごつく	ごつく	ごとし	ごつき	○

接續の關係

ごとしは、鏡ののやうな體言にのついたものにつくが、また、歲月、流るゝごとし。 辯舌、流るゝがごとし。

のやうに、用言の連體形、もしくは、それにがのついたものにもつく。

ごとしは、或ものを他に比べる意をあらはすに用ゐられる語であるから、これを、比況の助動詞といふ。

比況をあらはす

次の例について、助動詞を擧げ、それを説明なさい。

一、飼犬に手を噛まるといへる諺あり。

二、歲月は、流水の如し。しばらくも止らず。

三、秋の水澄みたれば、底の眞砂も數へつべし。

四、墨の如き樹影を浴びて、ひとり中庭の夜に立てば、月を帶ぶる白菊ほのかに香りて、花の月とさゝやく聲も聞えぬべき心地す。

五、うつむきて、その一枝を折らむとするに、しとど露にぬれたり。折れば、月影ほろ／＼とこぼれぬ。

六、親には、孝を盡くすべし。主人は、大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。

七、旅行にはよき日なりなど思ひつゝ、參詣人の群にまじりて行けば、大鳥居の、巨人の如く、わがゆくてに立てるあり。七十五尺の大鳥居とは、これなるべし。



第十三章 助詞

助詞の職能種類

(一) 助詞の職能種類

助詞は、語句の下について、その語句の位格を示し、その語句と他の語句との接續關係を示し、また、語句や文の下について、それに或意味をいひ添へる力を有するものである。

助詞は、(一)位格を示すもの、(二)接續をあらはすもの、(三)意味を添へるものの三種に分たれる。

位格を示す助詞

(二) 位格を示す助詞

の 山の上。鳥の聲。不用の品。月の出る頃。  
が 雪が降る。霜が白い。美しいのがよい。

を 蟲を捕へる。馬を走らせる。空を飛ぶ。

に 机に本を載せる。花見に行く。山に近い。九時に行かう。

と 犬に吠えられる。養子になる。

と 學校と家庭。雀、蛤となる。兄と頼む人。君と遊ぼう。

と 雨だと思ふ。それとちがふ。これと同じだ。

へ 東京へ行く。どこへ行くか。

より 雪より白い。學問より外には。

から 東京から大阪へ。來月からはじめる。それから後。

で 筆で書く。汽車で行く。病氣でたふれた。

文語の場合にあつても、からでを除いて、大體、この類の助詞が、右と同じやうに用ゐられる。

口語のからでに對する、文語の助詞は、よりにてである。  
東京より大阪へ。來月よりはじむ。それより後。

筆にて書く。

汽車にて行く。

病氣にてたふれぬ。

また、文語ののがには、次のやうな異なつた用法がある。

の 鶯の鳴く。 花の散るなり。

が 梅が枝。 歲月流るゝが如し。 今は世に亡きが多し。

右の類の助詞は、主として體言につく。 體言に準じて取扱はれる語句などにもつくことがある。

接続をあらはす助詞

〔三〕接続をあらはす助詞

ば この本は、讀めばわかる。 行かなければなるまい。

し 雨も降るし、風も吹く。 泣くし、わめくし、大變だつた。

と 話が長いとあきる。 家へ歸ると、日が暮れた。 雨が降らうと、風が吹かうと、きつと行きます。

が 私も行くが、あなたもおいでなさい。

水は深いが、大した

ことはない。

に 雨が降るに、よく來た。 折もあらうに、困つたことだ。

の に 雨が降るのに、よく來た。 寒いのに、大へんですね。

の で 雨が降るので、さぞお困りでしたらう。

から 風が吹くから、埃が立つ。 それでもよいから、はやくな

さい。

とも 遅くとも、十時には歸る。 どうならうとも、かまはない。

でも どこへ行つてもよろしい。 高くても買ひませう。

けれど 品はいゝけれど、値段が高い。 雨は降つてゐ

るけれど、(けれども)大したことはない。

文語の場合にあつては、おもに、次のやうな助詞が用ゐられる。

ば 讀まば、讀めば。 善くば、善ければ。

とも 雨降りぬともよし。 天氣よくとも、風強からむ。

ど 春立てど、花も匂はず。いふは易けれど、行ふは難し。  
 ども 春立てども。いふは易けれども。  
 が 雨は晴れたるが、風いまだやまず。忠告したりしが、その  
 かひなかりき。  
 に 河を渡らむと思ふに、水深し。日暮れかゝるに、宿るべき  
 所もなし。  
 を 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、雲のいづこに月やどる  
 らむ。

右の類の助詞は、主として用言につく。

意味を添へる  
助詞

〔四〕意味を添へる助詞

は 私・は・行く。君・は・どうする。美しくはない。  
 も 私・も・行く。君・も・行くか。美しくもない。

こそ 私こそ失禮いたしました。それこそ大事だ。  
 さへ 湯さへあれば結構です。強くさへあればよい。  
 でも お茶でも飲まう。誰にでもやらう。  
 しか 私しか知りません。これだけしかありません。  
 ばかり 猫ばかりかはいがつてゐます。あの方は、猫ばかりは大丈  
 夫と思つて居りました。  
 ままで 今まで待つてゐました。私までも御厄介になります。  
 など これなどは、上等の品です。手紙なども参りません。  
 やら 何やら、かやら、大さわぎです。あなたのやら、わたくし  
 のやら、わからなくなりました。  
 か どこかへ行きませう。これは何ですか。今晚、お伺ひい  
 たすかも知れません。  
 だけ 五圓だけ差上げておきます。兄にだけ知らせませう。

ぐらゐ それぐらゐのことは、すこしぐらゐはよろしい。  
な もう泣くな。そんなことをなさるな。

文語の場合にあつては、おもに、次のやうな助詞が用ゐられる。

は 雪は白し。君は知れり。  
も 雪も白し。君も知れり。  
ぞ 年ぞ暮れ行く。いづこをさして行くぞ。  
なむ 心なむすぐれたりける。  
や 花や散りぬる。わが思ふ人はありやなしや。  
か いづれか高き。雪かも降れる。何故なるか。  
こそ 人こそ來れ。かくこそありしか。  
だに 松の雪だに消えず。香をだに残せ梅の花。  
さへ 風さへ吹き出でぬ。香さへなつかし山吹の花。  
すら 行くへすら知らず。禽獸すら然り。

のみ 悲しくのみおぼえければ。よきをのみとる。  
ばかり 今日ばかりは、雨も降らざれ。  
な な悲しみそ。悲しみ給ふな。

以上の助詞は、種々の語句について、それぐの語のもつてゐる意義をいひそへるものであるが、これらの外に、また、感激の情を、他の語句の意義に添加してあらはすに用ゐられるものがある。これも種々の語句に附く。

ね それはね、大へんでしたよ。これはきれいだね。  
な それはいけませんな。よかつたな。  
や うたへや、騒げやで、ずるぶん盛でした。  
よ 今日暑いよ。もう花も咲くよ。

動詞助動詞の命令形に附くよも、この類のものである。同じく命令形に附くいも、この類である。

とも さうですとも。よろしうございますとも。  
さ 知れた事さ。それはおもしろいさ。  
文語において普通に用ゐられる、この種の助詞は、次のやうなものである。

や うてや、こらせや、敵國を。うれしや、たのもしや。  
よ 友よ來れ。日本一の名山よ。  
動詞の命令形に附くよも、この類のものである。  
かな 悲しいかな。きたなき身方のふるまひかな。

### 第十四章 文および文の成分

#### 主部・述部

#### 〔一〕主部述部

文法上で文といふのは、一つのまとまつた思想のいひあらはされ

たもので、敘述の題目となる部分と、題目について敘述する部分とより成る、一つゞきの言葉である。この、題目となる部分のものを主部と名づけ、敘述する部分のものを述部と名づける。

春が來た。 山の雪は、まだ消えない。  
主部 述部 主部 述部  
徳の高い人は、世に尊ばれる。  
主部 述部

#### 主語・述語

#### 〔二〕主語述語

川の水が、ひどくふえた。 \* 川の水 すこぶる増せり。  
主部 述部 主部 述部  
右の例における主部述部は、いづれも一つゞきの言葉から成つてゐるが、これらの各部には、それ／＼主要な役目をもつてゐるものがある。これを主要語といふ。

川の水が、ひどくふえた。 \* 川の水 すこぶる増せり。  
主語 主語

右のやうな、主部の主要語を主語と名づけ、述部の主要語を述語と

名づける。

もつとも簡単な文にあつては、文は、主語と述語とより成る。

水が 主語 ぶえた。 述語 \*水増せり。 主語 述語

補語

〔三〕補語

猫が 主語 鼠をとつた。 述部 \*猫鼠を捕へぬ。 主語 述部  
月が 主語 鏡に似てゐる。 述部 \*月鏡に似たり。 主語 述部

右の例における鼠を鏡には、述語のとつた捕へぬ似てゐる似たりに伴つて、その敘述の意義を補足するために要せられる語である。この種のものを補語と名づける。補語もまた文の敘述を完くする上に主要な役目をもつものであるから、文の主要語である。文には、主語・述語より成るものと、主語・補語・述語より成るものがある。これらの主語・補語・述語を、文の主要成分といふ。

主要成分

修飾語・被修飾語

〔四〕修飾語被修飾語

文には、主要成分以外の語句を有してゐるものがある。これらの成分は、主要成分に對して從屬關係に立ち、主要語の意義を修飾限定するため、いひ添へられたものである。これを修飾語と名づける。

川の水が 修飾語 ひどく 修飾語 ぶえた。 \*川の水 修飾語 すこぶる 修飾語 増せり。

右の例において、川のは、主語の水を修飾限定し、ひどくすこぶるは、それく、述語のぶえた増せりを修飾限定してゐる。

修飾語は、また、他の修飾語の意義を修飾限定することがある。

家の前の川の水が 修飾語 修飾語 主語 ぶえた。 述語

右の例において、家のは前を、前のは川を、川のは水を修飾限定してゐる。

修飾語によつて、修飾限定される語を、被修飾語といふ。

被修飾語

次の文について、主部と述部とを區別し、さらに主語・補語・述語・修飾語を説明なさい。

- 一、私は、よく、海にまゐりました。
- 二、黄金色の蜜柑が、そろく、市に出て來ました。
- 三、これは、ロシヤの片田舎の話です。
- 四、河を下る白帆が、一ぱいに、風をはらんでゐる。
- 五、初夏の風、すがくしく、廣野を吹き渡る。
- 六、\*箱根・足柄をつゝむと見えし雲は、黄金色に染まりぬ。
- 七、\*彼は、現代のわが國のもつとも完成せる作家の一人なり。

### 第十五章 文の複合——節

文の複合

#### 〔一〕文の複合

一つの文が、他の文中の一成分となり、主語・補語・述語、もしくは、修飾語と同様な資格で用ゐられることがある。かくの如き場合の現象を、文の複合といふ。

節、節の種類

節

節の種類

#### 〔二〕節の種類

一つの文が、他の文中の一成分となつてゐるものを、節と名づける。節には、體言節・用言節・連體節・連用節の四種がある。

體言節

#### 〔三〕體言節

花の散るのが、雪に似てゐる。  
主語 補語 述語  
 人は、人生の短いのを嘆く。  
主語 補語 述語  
 \*花の散る、雪に似たり。  
主語 補語 述語  
 \*人は、人生の短きを嘆く。  
主語 補語 述語

右の例の花の散る・人生の短い・人生の短きは、本來は一つの文なのであるが、それが、體言に準じて、主語もしくは補語として用ゐられてゐるのである。かくの如き類のものを、體言節と名づける。

用言節

〔四〕用言節

東京は、面積が廣い。  
主語 述語

あの人は、兄弟が多い。  
主語 述語

\*東京は、面積廣し。  
主語 述語

\*彼は、兄弟多し。  
主語 述語

右の例の、述語の部分は、本來は一つの文なのであるが、それが、用言に準じて、述語として用ゐられてゐるのである。かくの如き類のものを、用言節と名づける。

主要節

體言節および用言節は、共に、文の主要語の地位を占めるものであるから、これを總稱して、主要節といふ。

連體節

〔五〕連體節

赤松の多い山が見える。  
修飾語 主語 述語

赤松多き山見ゆ。  
修飾語 主語 述語

雲の晴れた空を飛ぶ。  
修飾語 補語 述語

\*雲晴れし空を飛ぶ。  
修飾語 補語 述語

右の例の、修飾語の部分は、本來は一つの文なのであるが、それが、體言を修飾する連體的修飾語として用ゐられてゐるのである。かくの如き類のものを、連體節と名づける。

連用節

〔六〕連用節

山道は、雨が降ると登りにくい。  
主語 修飾語 述語

山の上は、風が強いので寒い。  
主語 修飾語 述語

\*山道は、雨降れば登りにくし。  
主語 修飾語 述語

\*山上は、風強ければ寒し。  
主語 修飾語 述語

右の例の、修飾語の部分は、本來は一つの文なのであるが、それが、用言を修飾する連用的修飾語として用ゐられてゐるのである。かくの如き類のものを、連用節と名づける。

修飾節

連體節および連用節は、共に、文の修飾語の地位を占めるものであるから、これを總稱して、修飾節といふ。

次の文について、節をあげ、いかなる節であるかを説明なさい。

一、雨の降る夜はさびしう。



- 二、からだの大きな人は、立居がにぶい。
- 三、山の雪は、春が来ても、まだ消えない。
- 四、學校は、生徒が人格をきづき上げる所です。
- 五、\*紅葉の夕日に映えたるは、さながら、火の燃ゆるかとおぼゆ。
- 六、\*多くの人は、おのが心の愚なるを知らず。
- 七、\*わが國人の、公德心に乏しきは、識者の嘆ずるところなり。

### 第十六章 文の連結

#### 文の連結

##### 〔一〕文の連結

風が吹けば、波が立つ。 \*風吹き、波立つ。

右の文は、いづれも、風が吹くといふ文と、波が立つといふ文との結びついたものである。

二つ以上の文が結びついて、一つさきの形態を成す、かくの如き場合の現象を、文の連結といふ。

文の連結には、從屬的連結と對立的連結との二種がある。

#### 從屬的連結

##### 〔二〕從屬的連結

風が吹けば、波が立つ。 \*家大なれど、庭狭し。

右の文においては、上文は下文に對して從屬的關係に立つ。かくの如き連結の形式を、從屬的連結といふ。

#### 對立的連結

##### 〔三〕對立的連結

花が咲き、鳥がなく。 \*日、西に没し、月、東に在り。

右の文において、上文は下文に對して對立的關係に立つ。かくの如き連結の形式を、對立的連結といふ。

第十七章 主語各説

文の主語

〔一〕文の主語

文の主語は、敘述の題目をいひあらはすものであり、體言、もしくは、體言に準ぜられる語句節であるのを、原則とする。

文の主語と助詞

〔二〕文の主語と助詞

口語にあつては、主語と述語との關係を示すために、主語の下に、助詞が、をいひ添へるのを、原則とする。

飛行機が飛ぶ。

飛行機の飛ぶの見える。

文語にあつては、

\*飛行機飛ぶ。

\*飛行機の飛ぶ見ゆ。

のやうに、主語と述語との關係を示す助詞を用ゐないことが多い。

體言節・連體節の主語と助詞

〔三〕體言節・連體節の主語と助詞

體言節・連體節のうちにおける主語は、口語にあつては、助詞のを伴ふを、原則とする。

鐘の鳴るのが聞える。

色の赤い花が咲いてゐる。

文語にあつては、

\*月の出づる遅し。

\*月出づる遅し。

のやうに、助詞のを伴ふ場合と、伴はない場合とがある。

連用節の主語と助詞

〔四〕連用節の主語と助詞

連用節のうちにおける主語は、口語にあつては、助詞のを伴ふ。私は、雨が降つても出かけます。

この本は、値段がやすいので、よく賣れた。  
文語にあつては、助詞を伴はないのを、原則とする。

\*われは、雨降りぬとも行くべし。

\*この書は、價やすければ、よく賣れぬ。

の・がと他の  
助詞

〔五〕の・がと他の助詞

主語の下について、主語と述語との關係を示すに用ゐられる助詞は、上述のやうに、の・がの二つであるが、これらの外に、或意味をいひ添へる種々の助詞が、主語の下に用ゐられることもある。

雪は白い。

\*雪は白し。

人家も見えない。

\*人家も見えず。

私だけ参りました。

\*われのみ來りぬ。

風さへ吹き出した。

\*風さへ吹き出でぬ。

私こそ失禮しました。 \*月ぞ照りたる。

次の例について、文および節の主語を説明なさい。

- 一、船の機關長が、わたしたちの側へ来て、これが炭庫ですと云つた。
- 二、彼の詩集の、本屋に出たのは、三年ばかり前のことだつた。
- 三、堀の向うには、石垣のくづれたところがある。
- 四、煙草の世に行はるゝに至りしは、アメリカ發見以後の事なり。
- 五、波荒き海のさまものすごく、雲さへ降り來ぬ。
- 六、山の端あかうなりぬ。人々、月の出づるを見むとてさわぐ。
- 七、ほととぎす鳴きつる方をながむれば、たゞ有明の月ぞ残れる。

第十八章 述語各説

文の述語

〔一〕文の述語

用言句

文の述語は、主語によつていひあらはされた題目について、その動作状態性質を敘述する職能をもつものであり、用言用言節であるのを原則とする。  
咲いたらう。咲きました。咲いてゐる。の如き、動詞と助動詞との複合した一つどきのも、一つの用言に準ずる。特に區別する必要のある時には、これを、用言句とよぶ。

文の述語の形態

〔二〕文の述語の形態

文の述語は、用言の終止形でいひ切るのを、原則とする。しかし、或場合には、述語の下に助詞をつけて、いろくの意味をいひ添へることがある。用言節の述語も、これに準ずる。この場合に、口語にあつては、  
雨が降るぞ。 もう、秋が近いよ。 ずるぶん大きいね。

井戸は、どこにありますか。 そんなにお泣きなさいますな。のやうに、助詞が、用言の終止形につくが、文語にあつては助詞によつて、用言のうけ方が異なる。

- \* われも行かばや。(未然形をうける)
- \* 友は家にありや。(終止形をうける)
- \* 春も過ぎなむよ。(同上)
- \* 軒端の梅は、春を忘るな。(同上)
- \* 歌ふは誰なるぞ。(連體形をうける)
- \* 月は、雲にかくれたるか。(同上)

係結の法則

〔三〕係結の法則

前項の如く、文の述語は、用言の終止形でいひ切るのを、原則とするが、中古文では、主語に助詞ぞなむやかをいひ添へる時には、下を用

言の連體形で結び、主語に助詞こそをいひ添へる時には、下を用言の已然形で結ぶのが、原則となつてゐた。かくの如き法則を、係結の法則といふ。

\*花ぞ散りける。 \*人麿なむ歌の聖なりける。 \*知る人や無き。

\*誰か知るべき。 \*人こそ見えね。

口語で用ゐられるこそは、文の結びには關係がない。

私こそ失禮いたしました。

體言節の述語

〔四〕體言節の述語

口語の體言節の述語は、用言の連體形に助詞のをいひ添へるのを、原則とする。

月の出るのは何時頃でせう。

私は、月の入るのを見てゐました。

連體節の述語

文語の體言節の述語は、用言の連體形に終るのを、原則とする。

\*月の出づるは、八時頃なるべし。

\*この歌は、蓮葉の露のこぼるゝを見て詠めるなり。

〔五〕連體節の述語

連體節の述語は、口語文語を通じて、用言の連體形に終るのを、原則とする。

子供が、花の咲いた椿を折つて來た。

\*月光、露しげき野に滿つ。

連用節の述語

〔六〕連用節の述語

連用節の述語は、口語文語を通じて、形容詞および形容詞と活用を同じくする助動詞に終るものにあつては、その連用形を以て下文

に連なり、その他の用言にあつては、諸種の接續の助詞の附いた形で下文に連なるのを原則とする。連用節のうちには、また、用言の連用形に、助動詞での附いた形で下文に連なるものがある。

選手一行は、元氣よく出發した。わたしは、雨が降れば、家にあます。

\*後庭の筍、勢よく生ひ出でたり。\*湖面、月出でて、鏡の如し。

〔七〕文の連結と述語

文の連結と述語

二つ以上の文が連結される場合にあつては、上文の述語の形態は、その連結の性質によつて、趣を異にする。

從屬的連結の場合には、上文の述語の形態は、連用節の場合におけると同様である。

從屬的連結の場合

雨が降るので、道がわるい。 \*雨降れば、道わるし。

夜が明ければ、雨もやまう。 \*夜明けば、雨やまむ。

對立的連結の場合

對立的連結の場合には、上文の述語の形態は、用言の連用形に終るを原則とする。この場合の用法は、すなはち中止法である。

花もあり、實もある。 \*花もあり、實もあり。

山は高く、海は深い。 \*山は高く、海は深し。

對立的連結の場合にも、上文の述語に助詞を付けていひあらはすことがある。

花もあれば實もある。 花もあるし實もある。

次の例について、文および節の述語を説明なさい。

一、紅葉の風に散るのが、いかにもきれいです。

二、わたしは、ずっと以前から、この店の主人が誰だかを、よく知つてゐました。

三、宣教師は、年はもう五十を越してゐたでせう。それは、顔の赤い、短い頬鬚のあるフランス人でした。

- 四、\* 天氣晴朗なれども、波高し。
- 五、\* 東海の景は、富士によりて生き、富士は、雪によりて生く。
- 六、\* 緋鯉をどる池の汀に、一本の枝垂櫻、めでたく咲き匂へり。
- 七、\* 雨も降り出でぬべき空のけしきに、人々あわてまどふ。

### 第十九章 補語各説

文の補語

#### 〔一〕文の補語

文の補語は、述語の敘述の意義を補足するためにいひあらはされるものであり、體言もしくは體言に準ぜられる語句節であるのを原則とする。

文の補語の形態種類

#### 〔二〕文の補語の形態種類

文の補語は、體言もしくは體言に準ぜられる語句節に、にをとへよ

りからまでの等の助詞を付けていひあらはすのを原則とする。補語には、動詞形容詞助動詞の敘述の意義を補足するに要せられる補語と、使役もしくは受身をいひあらはす句の敘述の意義を補足するに要せられる補語とがある。

動詞の補語

#### 〔三〕動詞の補語

月が、鏡に似てゐる。 水が、湯となる。 幹事は、重任ときまつた。 私は、手紙を、ペンで書きます。 校長が、生徒に、卒業證書を授與する。

\* 友は、飛行機にて、海峽を横斷せり。 \* 古の人は、太陽を、動くと思ひき。 \* 日は、東より出で、西に入る。 \* 行脚の僧は、雨のやむを待てり。

右のうちで、手紙を卒業證書を海峽を太陽を雨のやむをの如き補

客語

語は、書く・授與する・横断す・待つ・の如き動詞によつてあらはされる動作の客體を示すものであるから、特にこれを客語と名づけて區別することがある。

形容詞の補語

〔四〕形容詞の補語

甲は、乙に等しい。      わたしの家は、停車場に近い。  
水の色、藍より青し。      \*わが家は、停車場に近し。

助動詞の補語

〔五〕助動詞の補語

楠木正成は忠臣だ。      \*加藤清正、先鋒たり。  
右の例におけるやうに、指定の意をあらはす助動詞と共に述語を形づくる體言は、これを助動詞の補語と見る。  
\*月、鏡の如し。      \*歲月、流るゝが如し。

使役の補語

〔六〕使役の補語

文語の助動詞如しと共に述語を形づくる鏡の流るゝがの類も補語として取扱ふ。  
僕は、弟に、手紙を書かせました。  
\*隊長、部下をして、停車場を攻めしむ。  
右のやうな例の、弟に部下をしては、いづれも下に來る使役のいひあらはし方に關する補語である。手紙を停車場をも補語ではあるが、これらは、書くもしくは攻むといふ動詞の補語(客語)である。

受身の補語

〔七〕受身の補語

甲は、乙に先んじられた。 \*われ、重要書類を、人に奪はれたり。  
右の例における乙に人には、いづれも下に來る受身のいひあらは



し方に關する補語である。書附を書類をも補語ではあるが、これらは、とる奪ふといふ動詞の補語(客語)である。

次の例について、補語を説明し、また、特に客語を區別なさい。

- 一、乳母は、忠實に、若殿に仕入ました。
- 二、少將は、感傷的に、將軍の逸話を話し出した。
- 三、雪舟が、お寺の小僧になつて間もない頃、或日、和尚さんに、大そう叱られました。
- 四、彼の要求をかなへてやることは、むづかしくはなかつた。しかし、わたしは、彼に強ひられるのがいやだったのである。
- 五、\*後姿を見せて、菊畑に立てるは、大村氏なり。
- 六、\*彼の歐洲へ赴きしは、二十六歳になれる年なりき。
- 七、\*今朝見れば山も霞みて、久方の天の原より春は來にけり。

## 第二十章 修飾語各説

修飾語

### 〔一〕修飾語

修飾語は、文の主要語以外の成分で、主要語の意義を修飾限定し、また、他の修飾語を修飾限定するためにいひ添へられる語句をいふ。文の修飾語として用ゐられたものは、修飾節である。これに、連體節と連用節との二種のあることは、既に説いた通りである。

修飾節

修飾語の種類

### 〔二〕修飾語の種類

修飾語には、體言、もしくは、體言に準ずるものを修飾限定する連體・修飾語と、用言、もしくは、用言に準ずるものを修飾限定する連用・修飾語との二種がある。

連體的修飾語

〔三〕連體的修飾語

(一) 梅の花。何の故。友だちからの手紙。昔よりの事。君が代。

(二) 燃える火。高い山。咲いてゐる花。降りくる雪。更けぬる夜。

右のやうな、(一)體言、もしくは、體言に準ずるものに、助詞の「が」のついたもの、(二)用言の連體形、もしくは、用言の連體形に終る一つづきの語句は、それごとく、下の體言を修飾限定するため、いひ添へられてゐる。これらの類を、連體的修飾語といふ。連體節も、また、連體的修飾語に準じて取扱はれる。

連用的修飾語

〔四〕連用的修飾語

(一)

あの山は、かなり高い。 \*月、おぼろに霞めり。

(二)

雨が、ひどく降る。 \*松林、黒くつゞけり。

(三)

聞いたばかりで、いやになる。勉強しなければいけない。

\*風、吹きに吹く。

\*歩みつゝ語る。

右のやうな、(一)副詞、(二)形容詞の連用形、(三)用言に助詞のついた一つづきの語句は、それごとく、下の用言を修飾限定するため、いひ添へられてゐる。これらの類を、連用的修飾語といふ。連用節も、また、連用的修飾語に準じて取扱はれる。

次の例について、修飾語を説明なさい。

一、ランプの光は、あざやかに、黒塗りのお膳の上を照らしてゐます。

- 二、埃風の吹く往來には、黒い、鍔廣の帽子をかぶつて、縞の荒い、半オーバアの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある、細い杖をかいこみながら、しよんぼりと立つてゐる。
- 三、\*霜白き曠野を照らす月の光、くまなく互え渡りて、寒威、ひしくくと、身にせまる。
- 四、\*餌をあさる、幾百の家鴨の子、群をなして、川を下る。長き竿もちたる老翁、船にありて、よくこれを導く。
- 五、\*初時雨ふりにし日より、神なびの森の梢ぞ色まさり行く。

### 第二十一章 文の種類

#### 文の種類

#### 〔一〕文の種類

文法上で、文を、その構造の形式の上から見て、**單文**・**複文**・**重文**の三種に分つ。

#### 單文

#### 〔二〕單文

文の、主語述語の關係が、たゞ一回だけ成立つてゐるものを、**單文**といふ。

秋の雨が、しめやかに降りつゞく。

たくさんの村人が、山火事を見てゐます。

\*鹿を逐ふ獵師、山を見ず。

\*夕立の雲、またゞくまに、空を蔽へり。

右のやうな文は、すべて單文である。

花子も、雪子も、おもしろさうに遊んでゐます。

\*彼女は、はやく父に別れ、今また、母を失へり。

右のやうな、主語が並んで居り、また、補語や述語の並んでゐるものも、或は共通な述語を有し、或は共通な主語を有してゐて、主語述語の關係は、たゞ一回しか成立たない。これらもまた單文である。

複文

〔三〕複文

文の成分に節を有するものを、複文といふ。

月體の出る言節のがおそい。

私は、友連體だちの來る節日節を待つてゐます。

\*東京は、用言節面積廣し。

\*彼は、連用節疑もなく表彰せらるべし。

右のやうな文は、節のうちにおいても、また、主語述語の關係が成立つて居り、その節は、主文の成分の一つとなつてゐる。かくの如き類の文は、複文である。

重文

〔四〕重文

二つ以上の文が、文法的に連結されて、一つゞきになつたものを、重文といふ。

風が吹けば、波が立つ。

雨も降るし、風も吹く。

\*山高く、水長し。

\*月は、昔ながらに照らせれど、人は、すでに遠く去りぬ。

右のやうな文は、前後の文において、主語述語の關係が、別々に成立つてゐる。かくの如き類の文は重文である。

次の例について、文の種類を説明なさい。

- 一、僕の兄は、身長が五尺七寸だ。
- 二、東京から來た列車が、今、驛に着いた。
- 三、勝つて喜ぶ人もあれば、負けて悲しむ人もある。
- 四、五島列島が、青い海の彼方に浮び、遠い水平線上には、五月半ばの白い雲が、初夏らしく湧いてゐる。

- 五、\* 一人の翁、淋しく山田の庵を守れり。
- 六、\* 老いたるも、若きも、幼きも、皆諸聲に萬歳を唱へぬ。
- 七、\* 樹、静かならむと欲すれども、風やまず。

### 新編實業日本文法終

### 附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」「ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ  
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ  
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ
- 四 「コトナリ(異)ヲ」「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

- 例 手習サス
- 周旋サス
- 賣買サス

六「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 罪サル

評サル

解釋サル

七「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム

上下貴賤ノ別ナク各其ノ地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シシカ」ニ連ネテ「暮シシ時」過シシカバ「

ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」過セシカバ「ナドトスルモ妨ナシ

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ

攻撃開始ヨリ陥落マデ僅カニ五箇月ヲ費セシノミ

九「てにをは」ノ「ハ」動詞・助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例 花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇 疑ノてにをは「ヤ」ハ動詞・形容詞・助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例 有ルヤ

面白キヤ

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

二「てにをは」トモ「ノ」動詞・使役ノ助動詞及ビ受身ノ助動詞ノ連體言ニ連

續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 數百年ヲ經ルトモ

如何ニ批評セラルトモ

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

三「てにをは」ト「ノ」動詞・使役ノ助動詞・受身ノ助動詞及ビ時ノ助動詞ノ連

體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例 月出ヅルト見エテ

嘲弄セラル、ト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其ノ徳ヲ稱ヘケルトゾ

三 語句ヲ列擧スル場合ニ用キルてにをは「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ

限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例 月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ

四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをは「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例 誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

五 てにをは「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キ

ルモ妨ナシ

例 何等ノ事由アルモ(ア)リトモ(モ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タ)レドモ(モ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シ)カドモ(モ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ス)レドモ(モ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(ケ)レドモ(モ)應募者ハ多カルベシ

六 「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨

ナシ

例 イハユル哺乳獸ナルモノ

顔回ナルモノアリ

### 理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セララル、モノハ、徳川時代國學者ノ研究ニ基キ、專ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ニノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其ノ用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ、文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其ノ許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ、同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今、文部省ニ於テハ教科書檢定、又ハ、編纂ノ場合ニモ、之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第五百十八號)

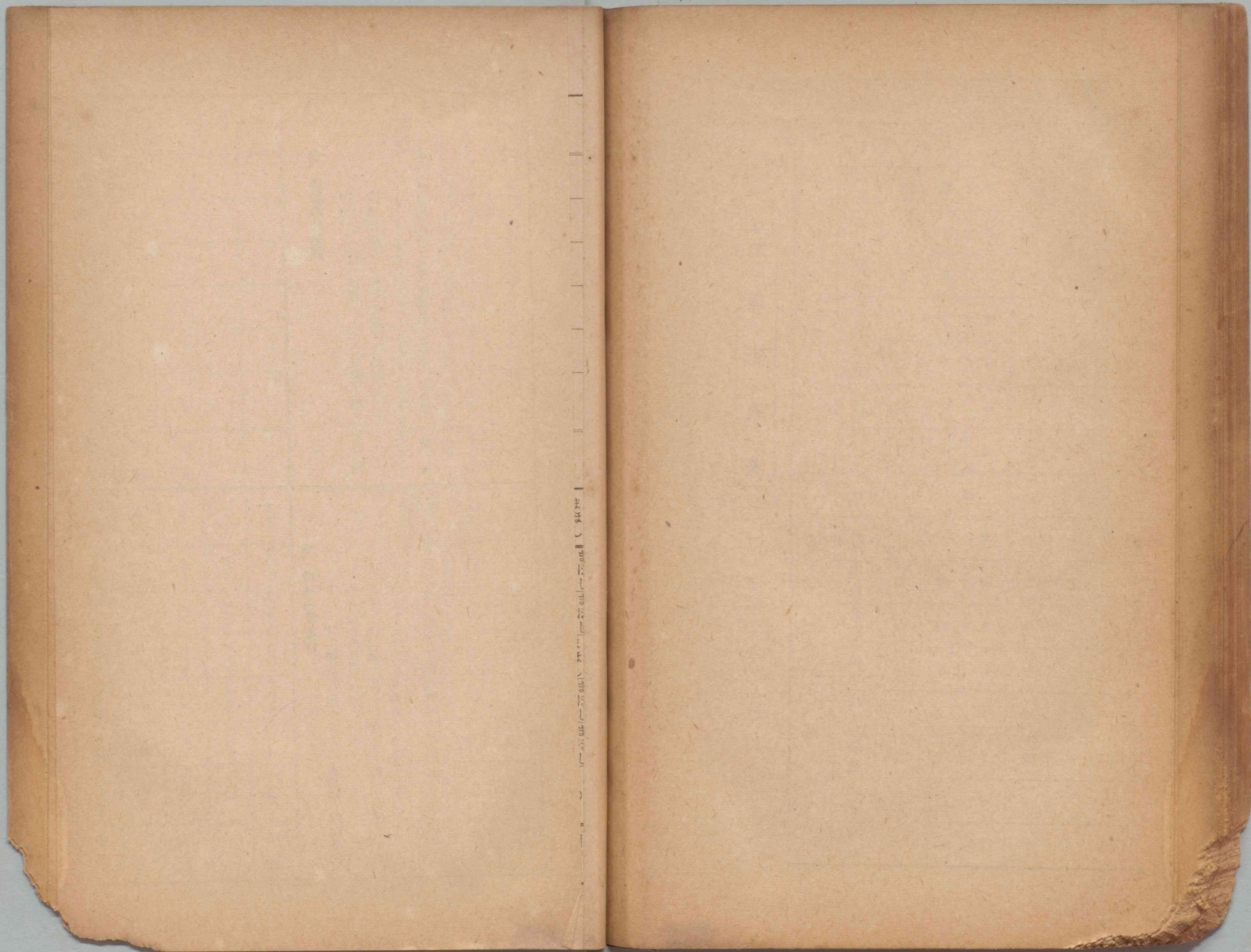


動詞對照表

		段 一 下															段 四										段	口			
ガ	カ	カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ラ	ナ	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	行				
過	起	蹴	植	流	絶	責	浮	堪	尋	撫	立	交	寄	告	受	(得)	有	死	取	讀	飛	思	立	押	漕	書	語幹				
ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然				
ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用				
ぎる	きる	ける	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	終止				
ぎる	きる	ける	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける	える	る	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	連體				
ぎれ	きれ	けれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ	えれ	れ	ね	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然				
ぎ(ろよ)	き(ろよ)	け(ろよ)	ゑ(ろよ)	れ(ろよ)	え(ろよ)	め(ろよ)	べ(ろよ)	へ(ろよ)	ね(ろよ)	で(ろよ)	て(ろよ)	ぜ(ろよ)	せ(ろよ)	げ(ろよ)	け(ろよ)	え(ろよ)	れ	ね	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令				
		下一段	段 二 下															良變	奈變	段 四										段	文
ガ	カ	カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ	ア	ラ	ナ	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	行				
過	起	蹴	植	流	絶	責	浮	堪	尋	撫	立	交	寄	告	受	(得)	有	死	取	讀	飛	思	立	押	漕	書	語幹				
ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	ら	な	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然				
ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け	え	り	に	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	連用				
ぐ	く	ける	う	る	ゆる	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く	う	り	ぬ	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	終止				
ぐる	くる	ける	うる	るる	ゆる	むる	ぶる	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる	うる	る	ぬる	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	連體				
ぐれ	くれ	けれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ	うれ	れ	ぬれ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	已然				
ぎ(ろよ)	き(ろよ)	け(ろよ)	ゑ(ろよ)	れ(ろよ)	え(ろよ)	め(ろよ)	べ(ろよ)	へ(ろよ)	ね(ろよ)	で(ろよ)	て(ろよ)	ぜ(ろよ)	せ(ろよ)	げ(ろよ)	け(ろよ)	え(ろよ)	れ	ね	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	命令				

文部省告示第百五十八號

佐變	加變	段 一 上															段 一 下															
		ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ		
(爲)	(來)	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	懲	老	試	綻	強	閉	落	過	起	蹴	植	流	絶	責	浮	堪	尋	撫	立	交	寄	告	受		
せし	こ	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け		
し	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け		
する	くる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	りる	いる	みる	びる	ひる	ぢる	ちる	ぎる	きる	ける	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける		
する	くる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	りる	いる	みる	びる	ひる	ぢる	ちる	ぎる	きる	ける	ゑる	れる	える	める	べる	へる	ねる	でる	てる	ぜる	せる	げる	ける		
すれ	くれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	りれ	いれ	みれ	びれ	ひれ	ぢれ	ちれ	ぎれ	きれ	けれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	べれ	へれ	ねれ	でれ	てれ	ぜれ	せれ	げれ	けれ		
せし よ(る)	こ よ(い)	ゐ ろ(よ)	い ろ(よ)	み ろ(よ)	ひ ろ(よ)	に ろ(よ)	き ろ(よ)	り ろ(よ)	い ろ(よ)	み ろ(よ)	び ろ(よ)	ひ ろ(よ)	ぢ ろ(よ)	ち ろ(よ)	ぎ ろ(よ)	き ろ(よ)	け ろ(よ)	ゑ ろ(よ)	れ ろ(よ)	え ろ(よ)	め ろ(よ)	べ ろ(よ)	へ ろ(よ)	ね ろ(よ)	で ろ(よ)	て ろ(よ)	ぜ ろ(よ)	せ ろ(よ)	げ ろ(よ)	け ろ(よ)		
佐變	加變	段 一 上															下 一段	段 二 下														
サ	カ	ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	カ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ダ	タ	ガ	カ	カ	ワ	ラ	ヤ	マ	バ	ハ	ナ	ダ	タ	ザ	サ	ガ	カ		
(爲)	(來)	(居)	(射)	(見)	(干)	(煮)	(着)	懲	老	試	綻	強	閉	落	過	起	蹴	植	流	絶	責	浮	堪	尋	撫	立	交	寄	告	受		
せ	こ	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け		
し	き	ゐ	い	み	ひ	に	き	り	い	み	び	ひ	ぢ	ち	ぎ	き	け	ゑ	れ	え	め	べ	へ	ね	で	て	ぜ	せ	げ	け		
す	く	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ける	う	る	ゆる	む	ぶ	ふ	ぬ	づ	つ	ず	す	ぐ	く		
する	くる	ゐる	いる	みる	ひる	にる	きる	る	ゆる	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐる	くる	ける	うる	る	ゆる	む	ぶ	ふる	ぬる	づる	つる	ずる	する	ぐる	くる		
すれ	くれ	ゐれ	いれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	づれ	つれ	ぐれ	くれ	けれ	うれ	るれ	ゆれ	むれ	ぶれ	ふれ	ぬれ	づれ	つれ	ずれ	すれ	ぐれ	くれ		
せ よ(る)	こ よ(い)	ゐ ろ(よ)	い ろ(よ)	み ろ(よ)	ひ ろ(よ)	に ろ(よ)	き ろ(よ)	り ろ(よ)	い ろ(よ)	み ろ(よ)	び ろ(よ)	ひ ろ(よ)	ぢ ろ(よ)	ち ろ(よ)	ぎ ろ(よ)	き ろ(よ)	け ろ(よ)	ゑ ろ(よ)	れ ろ(よ)	え ろ(よ)	め ろ(よ)	べ ろ(よ)	へ ろ(よ)	ね ろ(よ)	で ろ(よ)	て ろ(よ)	ぜ ろ(よ)	せ ろ(よ)	げ ろ(よ)	け ろ(よ)		



助動詞對照表

口、語

一、體言につくもの

體言に準ずる語句にもつく。

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	だ	○	で <small>(であらう)</small> <small>(だらう)</small> <small>(だつた)</small>	だ	○	○	備考
なり	なり	なり	なり	なり	な	なれ	○
です	です	でせ	で てした	です			指定

二、動詞・助動詞の未然形につくもの

×れる・せるは、四段活用のものにつく。られる・させるは、その他の活用のものにつく。  
△うは、四段活用のものにつく。ようは、その他の活用のものにつく。

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	れる	れ	れ	れる	れる	れ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	備考
×	られる	られ	られ	られる	られる	られ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	受身 敬語 可能 命令 命令形は 命令
×	せる	せ	せ	せる	せる	せ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	使役
×	させる	させ	させ	させる	させる	させ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	使役
	ない	なく	なく	ない	ない	なけれ	○
	△う	○	○	う	○	○	未來
	△よう	○	○	よう	○	○	未來

三、動詞・助動詞の連用形につくもの

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	て	○	て	○	○	○	備考
た	たら	たり	た	た	○	○	過去

文 語

一、體言につくもの

×なりは、體言に準ずる語・句・節にもつく。  
また、用言の終止形にも連體形にもつく。

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	なり	なり	なり	なる	なれ	なれ	備考
たり	たり	たり	たり	たる	たれ	たれ	指定

二、動詞・助動詞の未然形につくもの

×る・すは、四段活用・奈行變格活用・良行變格活用のものにつく。らる・さすは、その他の活用のものにつく。

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	る	れ	れ	る	る	れ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	備考
×	られる	られ	られ	られる	られる	られ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	受身 敬語 可能 命令 命令形は 命令
×	する	せ	せ	する	する	せ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	使役
×	さす	させ	させ	さす	さする	さす <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	使役
	しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ <small>(ろ)</small> <small>(よ)</small>	敬語
	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	打消
	じ	○	○	む	め	○	未來
	む	○	○	む	○	○	未來
	まし	○	○	まし	○	○	推量
	まほし	○	○	まほし	○	○	願望

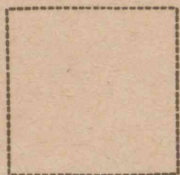
三、動詞・助動詞の連用形につくもの

×き・し・しがが、加行變格活用・佐行變格活用に  
つくには、特例がある。

活用形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
語	き	○	き	○	○	○	備考
つ	つ	つ	つ	つ	つ	つ	過去
けり	けり	けり	けり	けり	○	○	過去
つ	つ	つ	つ	つ	○	○	完了



昭和十二年七月二十五日  
 昭和十二年十一月二十五日  
 昭和十二年十一月三十日  
 印刷  
 發行  
 再版  
 修正  
 再版  
 發行



著者

安藤正次

發行者

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社

印刷者

代表者 山本慶治  
 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地  
 株式會社 三省堂蒲田工場  
 代表者 岸本玄男

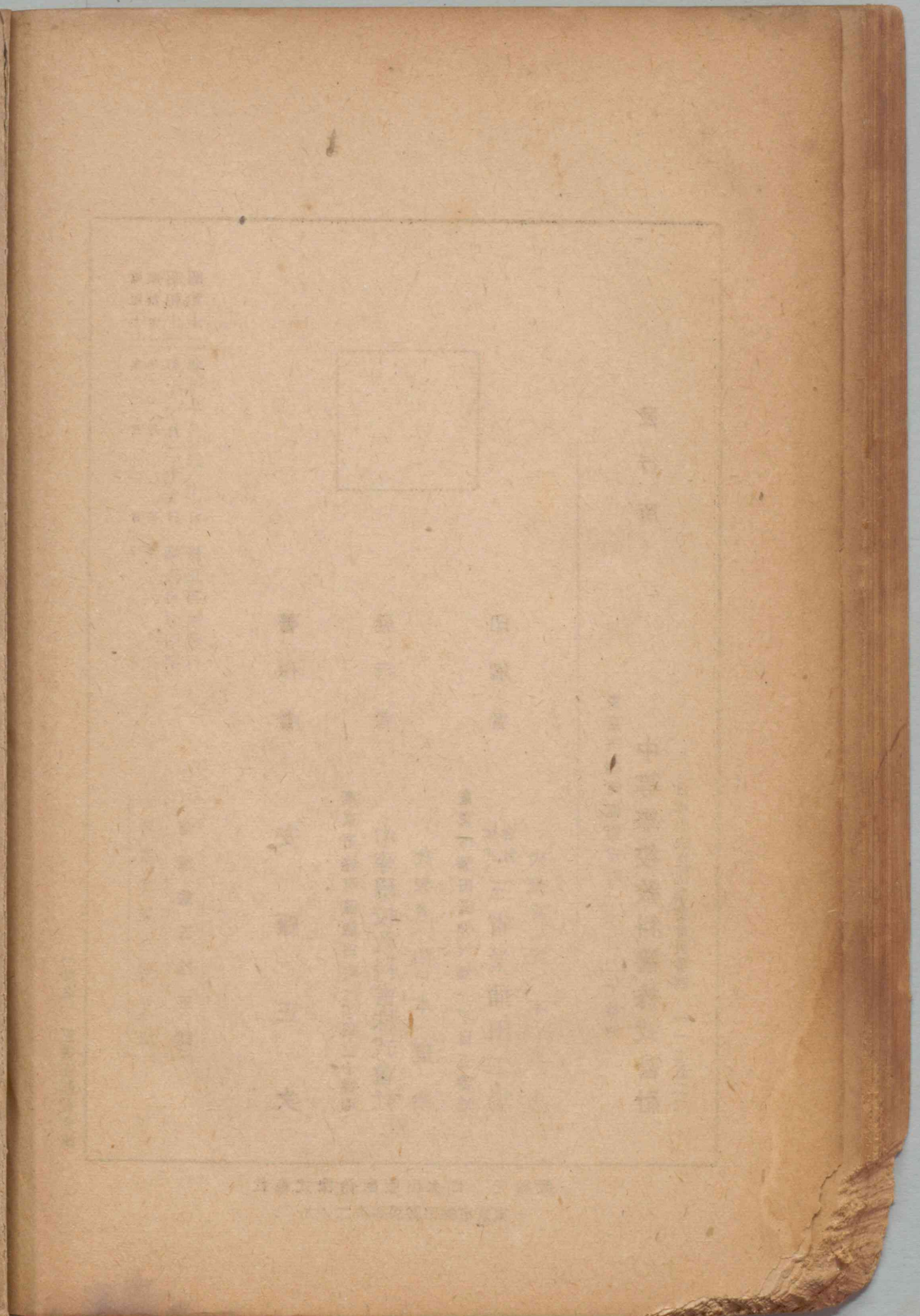
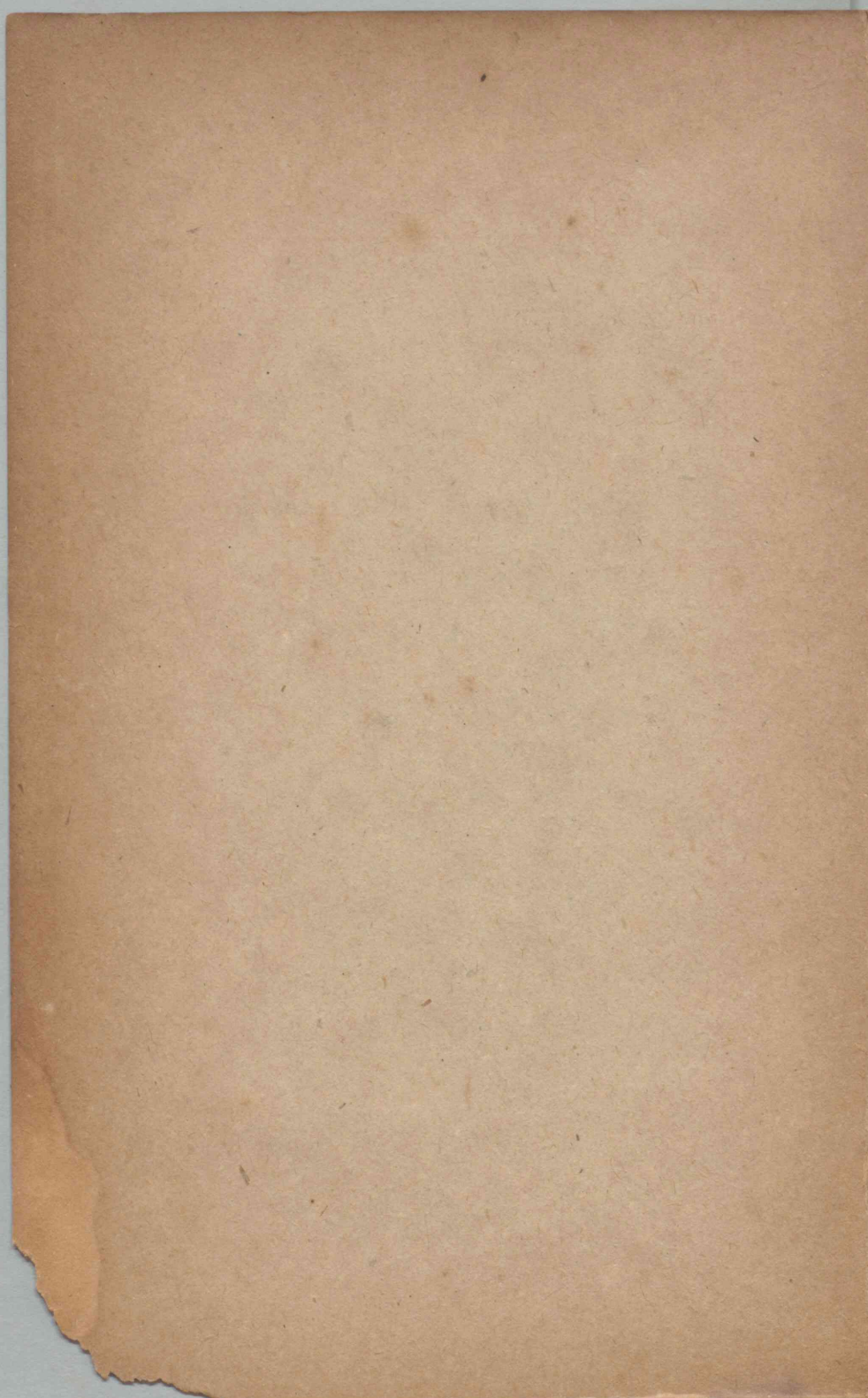
發行所

東京市麴町區飯田町二丁目二十番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版文化協會會員番號 一七五三二

新編實業日本文法
定價金五拾五錢

(略名) 三省堂實業文法

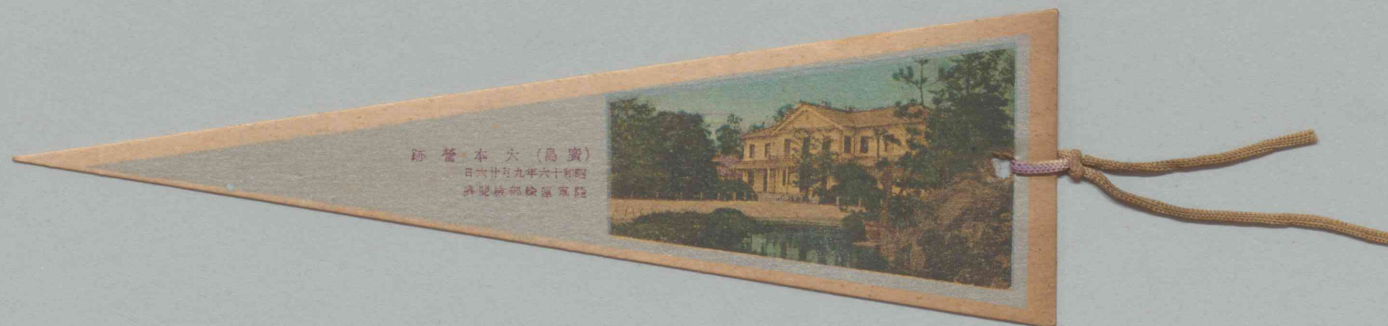
配給元 日本出版配給株式會社  
 東京市神田區淡路町二ノ九



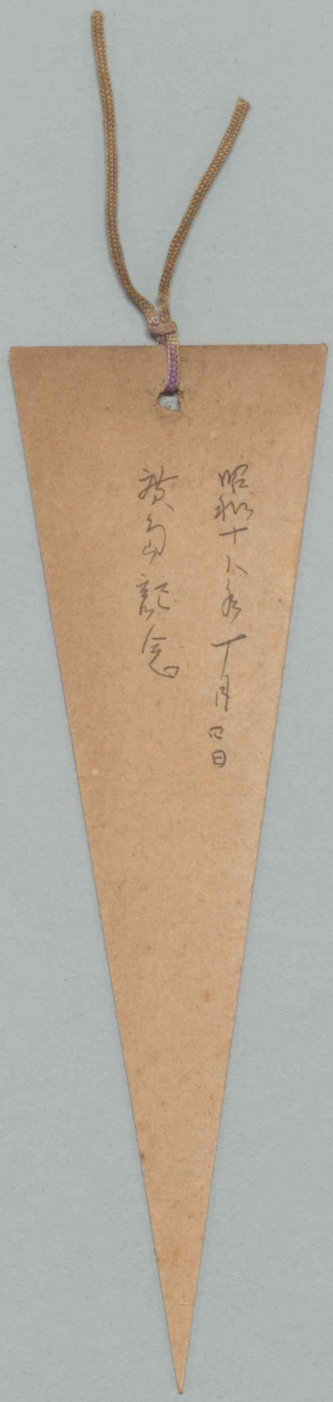
庫  
37  
070

広島大学図書  
2000064970  



廣 大 本 營 ( 廣 大 )  
日 六 廿 九 年 六 十 第 四  
廣 東 省 郵 政 局 發 行



昭和十八年丁卯日  
被り記念